ゲンドゥンチュンペー著『世界知識行』第1章和訳
—1930年代のチベットにおける梵文写本調査記録—(1)

加　納　和　雄

1　はじめに

ゲンドゥンチュンペー(dGe 'dun chos 'phel, 1903-1951)は、伝統を重んじる保守的なチベット社会に近代化の波が押し寄せる激動の時代、いち早く国外の世界に目を向け、欧米の近代文化を紹介してチベットの発展のために身を献じた人物である。その才能は伝統的な仏教学のみならず、絵画制作、詩作などの芸術活動、紀行文、歴史書、言語学書、地理学書、随筆の執筆、さらには翻訳活動など、さまざまな分野において発揮された。これまでもその顕著な業績は注目されてきたが、その著作の研究はいまだ十分には進んでいない。とりわけ主著である『世界知識行・黄金の平原』の解明は当面の大きな課題として残されている。

本稿は、この『世界知識行』に焦点を当て、特には、梵文仏典写本を探索するラーフル・サーンクリッティヤーヤン(Rāhula Sāṅkṛtyāyana, 1893-1963)に助手として随行し、中央チベットの諸寺をめぐってからインドに至るまでの行程を詳述する第1章に関して訳注を試みるものである。ここに第1章をとりあげるのは、サーンクリッティヤーヤンらが行った梵文仏典写本調査の実態を明らかにするためである。この調査の際に発見された膨大な梵文仏典写本[1]のおかげでインド大乗仏教の研究は著しく進展したが、その一方で調査そのものについてはこれまで十分に検討されておらず、その多くが未解明のまま残されている。特にこの点は、サーンクリッティヤーヤンの手になるヒンディー語で綴られた自伝『わが人生の旅路』の記述を参照しながら検討する必要がある[2]。

また第一章はゲンドゥンチュンペーの人生観を大きく変えた「インド入国」という一大イベントを扱うため、ゲンドゥンチュンペーの人物像を解明するためにも貴重な資料となる。

さらには本書の詳細な描写は文化大革命による破壊以前の多くのチベット寺院の

姿・状況を知るための有力な手掛かりとなる。

2　ゲンドゥンチュンペーの略歴

ゲンドゥンチュンペーは1903年4月20日にチベットのアムド地方で生まれた[3]。幼くしてニンマ派の活仏転生者として認定され、幼少期にはニンマ派の仏教学の伝統を学んだ。青年期にはさらなる学問の研鑽を志してゲルク派の大学問寺ラプラン・タシキルで学び、27歳になると当時のチベットにおける学門寺の最高峰の一つであったデプン寺のゴマン堂でさらに仏教学の知識を深めた。彼の学識は、そこにおいて行われていた伝統的な僧院の学問問答(rtags gsal)において負けることがないほどに高められていたといわれるが、僧院での保守的な風潮が合わなかったため、師シェーラプギャムツォ(Shes rab rgya mtsho, 1884-1968)との確執を生じたこともあり、僧院生活に疑問を持つようになっていた[4]。

そのような折に、人生の転機をもたらしたのが、ラーフル・サーンクリッティヤーヤンとの邂逅であった。1934年、32歳のとき、インドから梵文仏典写本の原典を求めて入蔵したラーフル・サーンクリッティヤーヤンに誘われるままにその調査に同行したのは、国外の世界への憧憬もさることながら、幼少時以来、抱いていた聖地インドへの巡礼という念願を叶えるためでもあった。サーンクリッティヤーヤンは突出した仏教学者であると同時に共産主義に深く関わったインド独立運動の活動家でもあり、彼の人間性と思想は生涯にわたってゲンドゥンチュンペーに影響を与え続けた。

中央チベットにおいて諸寺の巡礼と梵文写本の調査を終え、ネパールを経由してインドに入国した後、ゲンドゥンチュンペーはインドの各地を巡りながら、ラビンドラナート・タゴール（1861-1941）やジャック・バコー（1877-1965）などの東西の知識人たちとの交流を深めてゆく。1938年(５月４日～９月25日)には再びサーンクリッティヤーヤン同行してチベットにおける梵文写本調査を再度敢行して大きな成果を収め、再びインドに戻る。このころジョージ・レーリッヒ（1902-1960）と共訳したチベット仏教史『青史』の英訳は、チベット仏教史翻訳研究の金字塔として打ち立てられ、その学術的価値は今なお色褪せるところがない[5]。

1941年にはスリランカに渡り大菩提協会(Maha Bodhi Society)に属した。そこにおいてはサンスクリットを修得する一方で、著作活動にも専念していった。『世界知識行』もこの時期にスリランカにおいて脱稿されたものである。

彼がチベットに戻ったのは44歳の折、ラサへの帰還は12年ぶりことであった。ラサに戻ってからは、故国チベットの過去と現在について、チベットの人々に正しく知ってもらうために、チベット史の著作に専念する。しかし石碑調査などに意欲的に取り組んでいたさなか、翌年の1946年には予期せぬ事態に巻き込まれる。帝国主義者の嫌疑で政治犯として冤罪をかけられて投獄されたのである[6]。およそ3年間の獄中生活を強いられた後、ゲンドゥンチュンペーは恩赦によって釈放されたものの、ほぼ廃人と化し、釈放の翌年(1951年)には病の床に伏して帰らぬ人となった[7]。

3　著作および先行研究

ゲンドゥンチュンペーの著作集はこれまで5種類が刊行されており[8]、それ以外にも著作集に未収録だが他所で刊行された作品もあり、さらには未公開のものある。Mengele (1999: 85-113)によると出版された作品は58点、未出版の作品は47点あるという。著作の内容は多方面にわたり、既出版の作品には、翻訳作品3点、言語学および詩文作品30点、仏教哲学作品1点、紀行文および巡礼案内2点、歴史作品6点、英文記事5点、英文詩4点、書簡1点、共著作品2点、その他4点が含まれ、さらに絵画作品も残されている。

ゲンドゥンチュンペーについての先行研究は主に伝記研究と著作研究とに大分される。伝記研究[9]はStoddard 1985やIngard 1999をはじめとする優れた成果が発表されており、また星泉准教授(東京外国語大学)の研究班による、ホルカン・ソナムペンバーの手になるゲンドゥンチュンペー伝の和訳も刊行される予定である。

いっぽう著作研究については伝記研究に比べて遅れている。これまでに発表された代表的な研究は、『世界知識行』(抄訳)、『ヒマラヤ論考』、『インド聖地巡礼案内』、『白史』の中国語訳を収録した格桑曲批1996や、『インド聖地巡礼案内』を英訳したHuber 2000、『龍樹の思想の飾り』を英訳したLopez 2006、また韻文作品を選出して英訳したLopez 2009などがある。

著作と先行研究等についての網羅的な書誌情報については上記のホルカン作の伝記の和訳序文に収録される予定であるため、本稿では略説するにとどめたい[10]。

4　『世界知識行』管見

『世界知識行』の奥書には、「ゲンドゥンチュンペーがスリランカのチェチェン

(bye can)寺院に滞在した時に〔草稿を〕送った」[11]とあるため、スリランカに滞在していた1941年に脱稿したとされる[12]。本書はラサを発ちインドに向かう場面の描写から始まり、インド各地で自ら見聞したことを主題別に綴った作品である。序文では「胡麻粒に胡麻油が満ち溢れているように」チベットにはインド文化が浸透していることを述べて、チベット文化をより深く知るためにインド文化を理解する必要性を説く。そして本作を著述した動機を次のように語る。

それゆえ古い学者の学説に拠って〔のみ〕
意味を味わい体験する、かの〔チベット人〕たちに
この国〔インド〕の有り様を詳しく語ることを通じても
学問分野を全うするのに役立つとおもわれるので

視覚や聴覚の対象となっておらず
家で寝ながら考えても知りえない
ある限りのこもごも肝心なことを
具体例を踏まえて以下に説こう。

ゲンドゥンチュンペーが本書を著したのは、古典作品に描写される中世インドではなく現在のインドの姿をチベットの人々に知ってもらうためであり、さらにはチベットが現代化の波に取り残されることのないようにとの願いが込められていたようにも思われる。というのは当時、列強諸国に立ち向かい民族独立運動を展開したサーンクリッティヤーヤンや、スリランカの大菩提協会を創立したアナガリカ・ダルマパーラ(1864-1933)の影響を受け、ゲンドゥンチュンペー自身もまたチベット民族の自立を意識していたからである。

また『世界知識行』の序文では、美辞麗句を離れた公正な立場を旨とすることを繰り返し強調し、この決意を「初発心」と自ら表現し、本書の中においてありのままの事実を正しく伝える誓いを立てる。この姿勢は本書において一貫しており、本書を締め括る結びの詩にも表明されている[13]。

『世界知識行』は全17章からなる。下記のごとく、その内容は、インドについての概説、歴史的、地理的考察、食や言語をはじめとする諸文化、さらにはインド周辺諸国の考察にまで及ぶ広範なものとなっている[14]。

第１章　最初にラサを出発した様子
第２章　インドの概説[15]
第３章　〔インドの〕国名がどのように命名されていたか
第４章　北方の雪山とそれに関する問題の分析
第５章　著名な歴史的地域の過去の状況
第６章　男女、飲食および日用品などについて
第７章　樹木や花などの識別および判別方法
第８章　古今の各地の文字の種類
第９章　チベット文字の音韻論について
第10章　ナガレ山の石面に刻印されたアショーカ法王の文字
第11章　グプタ朝王統記
第12章　パーラ朝王統記
第13章　仏滅後1600年から現在まで
第14章　スリランカ史について
第15章　過去のチベット人たちの状況と生活習慣の様子について
第16章　非仏教徒の教えの伝統
第17章　おわりに

上掲のごとく、本作第１章は紀行文調のスタイルで綴られるが、第２章以降は論考の色合いが濃くなる。全17章のうち第１章（抄訳）、第４章、第６章（抄訳）、第８章、第９章、第11章（抄訳）は格桑曲批1996の中国語訳が発表されており、またLopez 2009には本書の詩節が抜粋されて英訳されるため、拙訳においては必要に応じて参照した[16]。

5　『世界知識行』第１章の科文

本稿で扱う第１章は「最初にラサを出発した様子」と名づけられ、チベットからインドに至るまでの行程における主な出来事を記し、チベット文化に対する様々な考察を織り込んだ紀行文であり、その科文は以下のごとくである。科文においてボールド字体で示した箇所は本稿に和訳を提示し、残りの箇所については稿を改めて和訳を発表したい。

冒頭偈　(H 3, Z 1)
序文　(H 4.7, Z 2.6)
1 出発年と暦算方法　(H 6.11, Z 4.4)
2 ラーフル　(H 7.2, Z 4.16)
3 ペンユル地方　(H 7.12, Z 5.4)
4 ギェーラカン　(H 7.20, Z 5.12)
4.1 略史　(H 7.20, Z 5.12)
4.2 弥勒像　(H 8.5, Z 5.18)
4.3 寺院の立地　(H 9.13, Z 7.1)
4.4 石碑　(H 10.11, Z 7.20)
5 パツァプ寺　(H 11.19, Z 9.5)
6 レディン寺　(H 12.11, Z 9.16)
6.1 梵文写本　(H 12.11, Z 9.16)
6.2 栴檀樹　(H 13.14, Z 10.19)
7 ラサからギャンツェへ　(H 13.21, Z 11.3)
8 ポカン寺　(H 14.2, Z 11.6)
8.1 概説　(H 14.2, Z 11.6)
8.2 寺宝　(H 14.8, Z 11.11)
8.3 梵文写本　(H 15.20, Z 12.21)
9 シャル寺奥の院リプク　(H 16.17, Z 13.17)
9.1 寺院の様子　(H 16.17, Z 13.17)
9.2 チベット語古写本　(H 16.20, Z 13.20)
9.3 梵文写本　(H 18.3, Z 15.1)
10 ゴル寺　(H 27.20, Z 24.3)
10.1 概説　(H 27.20, Z 24.3)
10.2 チベット語写本　(H 28.3, Z 25.3)
10.3 梵文写本　(H 28.6, Z 25.5)
11 サキャ寺　(H 31.6, Z 28.1)
11.1 ゴルム堂の梵文写本　(H 31.7, Z 28.3)
11.2 チャクペー堂の梵文写本　(H 31.14, Z 28.9)
12 タナー・トュプテンナムギェー寺　(H 33.14, Z 30.8)

13 ダクポ地方　(H 33.15, Z 30.9)
14 クンデリン寺　(H 33.17, Z 30.11)
15 ナルタン寺　(H 34.1, Z 30.14)
15.1 チベット語写本　(H 34.1, Z 30.14)
15.2 金剛座の模型　(H 34.4, Z 30.18)
16 サムイェー寺　(H 34.16, Z 31.8)
17 チベット寺院所蔵のインド写本の価値　(H 34.18, Z 31.10)
18 サキャからネパールへ　(H 35.18, Z 32.10)
19 ネパール　(H 36.5, Z 32.17)
20 祭官ヘムラージ　(H 36.20, Z 33.12)
21 リユル　(H 38.20, Z 35.13)
22 ガンジス河　(H 40.1, Z 36.14)

6　サーンクリッティヤーヤンとの出会い

サーンクリッティヤーヤンが中央チベットを初めて旅行したのは1929年7月19日から1930年4月24日にかけてであり、チベット伝来の梵文写本の存在についてはすでにその時点で耳にしていたが、単なる噂と考えていた。しかしその後に得たいくつかの情報によってやがてその存在を確信し、第2回目の入蔵を決意した。そしてサーンクリッティヤーヤンは1934年5月19日にラサに到着し、6月20日にゲンドゥンチュンペーおよびその師シェーラプギャムツォに出会った[17]。サーンクリッティヤーヤンの自伝『わが人生の旅路』(vol. 2, p. 249)には、ゲンドゥンチュンペー(梵語名の Dharmavarddhana で呼ばれる)との出会いについて以下のように記される。

> 〔1934年〕6月20日、私はデプン寺のアムド出身の画師に初めて出会った。その日、〔彼は〕ゲシェー・ゲンドゥンチュンペーという名前で私に紹介された。そのときはまだ、この細身の素朴な男が、チベット文学と哲学の優れた学者であり、才能あふれる画家であり、第一級の詩人であり、自由思想主義の者であることなど知る由もなかった。彼とは、このとき以来、何年にもわたってつきあい、〔後々、〕より一層彼に魅せられていった。1948年に彼がその自由主義思想のために、チベット政府によって投獄されたのを知ったときは、気が気でなかったが、〔後に〕将軍であるショカンづてに彼の釈放につ

いての知らせをうけて、はじめて安堵することができた。〔彼と出合った〕初日、話し合いをしたが、そのときは、ゲンドゥンチュンペーが私と共に来るという素振りはひとつもなかった。〔私は自分の〕日記に以下のように記している。「彼は文学について博識であり、『プラマーナヴァールティカ』もよく学んでいる。また非常にたくさんのサーラスヴァタ〔梵文文法学〕のスートラを記憶している。この点で彼は単なる絵描きではない。彼はインドに行くことを望んでいた。サムイェー寺への旅路を共にしない手はないだろう。」[18]

引用末尾に述べられるサムイェー寺への旅は断念されたが、この出会い以来、両者の交流は生涯にわたって続いた。

7　1934年の梵文写本調査の旅程(7月～8月)

『わが人生の旅路』は『世界知識行』よりも描写が詳細であるため、それによって調査の旅程についてもより正確に知ることができる。サーンクリッティヤーヤンはラサのクンデリン寺で３点の梵文貝葉写本を確認した後[19]、レディン寺に保存されていた、アティシャがインドから将来した半焼の写本の情報をレディン・リンポチェ(1917-1947)から得て[20]、1934年７月30日レディン寺へ向けてラサを出発した[21]。レディン寺はカダム派の古刹であり、ラサの北にあるペンポ地方のさらに北西に位置し、1930年代当時においては３日間の行程を要した。彼らがラサを出て、ペンポ地方でチベット仏教の古刹寺院を訪ね、レディン寺に至りラサに帰還した旅程は、『わが人生の旅路』によると以下のごとくである(本稿拙訳においてはラサ出発からギェーラカンの調査までの箇所を収録)。

1934年
７月30日　ラサを出発
７月31日　ランタン寺とナーレンドラ寺を訪問
８月１日　パツァプ寺とギェーラカンを訪問
８月２日　シャラワ寺を訪問
８月３日　タクルン寺を訪問
８月４日　チョムラカンを訪問
８月５日　レディン寺に到着

8月6日　レディン寺を出発
8月7日　ダギャ寺を訪問
8月8日　ラサに帰還

結局、レディン寺での調査は成果があげられなかったが、ラサに帰還した後、ツァン地方の諸寺に所蔵される梵文写本についての確かな情報が得えられた。その結果、シャル・リプク、ゴル、ポカン、サキャ等の各寺院の図書館で膨大な梵文写本を確認することができた。この1934年の写本調査の成果は、『梵文写本目録』として公開され、その後の1936年および1938年[22]の補充調査で得られた成果も順次公表された。

8　底本および凡例

『世界知識行』のチベット語テクストは、サムドン・リンポチェが1986年に出版した活字本（以下Zと略称）と、ホルカン・ソナムペンバー（Hor khang bSod nams dpal 'bar, 1919-1994）が1990年に『ゲンドゥンチュンペー著作集』に収録した活字本(以下Hと略称, 2009年再版)との2版がある。

Z: サムドン版。*gTam rgyud gser gyi thang ma of dGe 'dun chos 'phel, With an Introduction cum Review by Ven. S. Rinpoche.* The Dalai Lama Tibeto-Indological Series-VII. Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies. 1986.

H: ホルカン版。*dGe 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom* (I). Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang. 1990. pp. 3-40.

サムドン版で使用された『世界知識行』の底本については次のように記される。

このテクストのもとの原本は真言者(sngags 'chang)イェーシェーテンギェー氏からもたらされ、ブータン紙の上に速記体で記され、ページの裏表が丸まっており、72ページからなる経巻で、1肘(肘から指先までの長さ)あり、インドのダラムサラ・チベット図書館において、アムド出身の大学者ゲンドゥンチュンペーの全集のなかに収録される。幸あれ。

一方、ホルカン版を編集したホルカン・ソナムペンバーはゲンドゥンチュンペーの弟子であり、全集の序文では彼が用いた写本の由来について記される。すなわち、ゲンドゥンチュンペーが晩年、自らホルカンに『世界知識行』などの手書き原稿を預け、1962年には中国科学院人民委員会が調査のためにその原本から複写本を作成し、文化大革命のときには原本がチベット自治区の参事室事務局に回収され失われたが、後に中国社会科学院所長ラクパプンツォー氏の助力によって複写本を使用して全集を出版することができたという[23]。しかしながら、ホルカンは写本原本を拝見しえず、複写本を入手できたのみであった。そのため誤字脱字が多く、校正編集作業が難航したという[24]。

以上のことからサムドン版とホルカン版とのいずれもが、ゲンドゥンチュンペー本人の手書き原稿に基づくものではないことが分かる。そして、両版がそれぞれ異なる複写本に基づいていることは、両者の間に散見される異読から明らかである。ホルカン版とサムドン版のいずれが原本に近いのかは判断し難いため、以下に提示する拙訳およびチベット語校訂テクストにおいては、出版年が早いサムドン版を底本として、適宜ホルカン版を参照した[25]。

拙訳においてはサムドン版の頁番号を本文左側欄外に示し、鉤括弧〔　〕内には文脈上必要な語句を補い、丸括弧（　）内にはチベット語原文の提示および単語の補足説明をおこなった。拙訳の後にはチベット語校訂テクストを附した。また、ギェーラカンに関しては、２点の補足資料(チベット語からの和訳)を本稿末尾に附した。１点はホルカン・ソナムペンバーによる巡礼記録(Hor khang 1983)からの抜粋、もう１点は近年刊行された巡礼記(Chos 'phel 2003)の中にみられるギェーラカンについての歴史である。

和訳

Z1　『世界知識行・黄金の平原』

正等覚者・仏・世尊の御足の蓮華に対し〔身口意の〕三門をもって恭しく礼拝し帰依します。

[冒頭偈]

奥深く輝かしい智慧の光輪をもって闇の世間を破壊なさり
解脱寂静の三昧の御足によって有頂を制し
戯論の雲による汚れがすっかり浄まった、無垢なる虚空の御心を持つ
吉祥なる世界の太陽、それにてあなた[26]に幸運が降り注ぐだろう。

雪山国〔チベット〕で昔のよい風習から[27]
続く、披見されうる限りの高潔なありかたは
聖地〔インド〕の人の〔身口意の〕三門全ての行状の
姿が転写された絵画の如く〔今日まで〕存続している。

それゆえ古い学者の学説に拠って〔のみ〕
意味を味わい体験する、かの〔チベットの〕人々に
この国〔インド〕の有り様を詳しく語ることを通じても
Z2　学問分野を全うするのに役立つとおもわれるので

視覚や聴覚の対象となっておらず
家で寝ながら考えても知りえない
ある限りのこもごも肝心なことを
具体例を踏まえて以下に説こう。

[序文]

(チベットにおけるインド文化の影響)

さてわが国では菩薩である君臣達が模範とされているので、そこから仏教がチベットへ伝来した特別な〔仏教発祥の〕地、すなわち聖地インドに対し、あらゆる階層の人々の[28]無限の篤い信仰、恭敬がある。それゆえ本国〔チベット〕の学者たちの思考方法、著作方法、服飾、宗教儀礼を始めとする〔身口意の〕三門のあらゆる営みには、胡麻粒には胡麻油〔が満ちている〕ごとくインドの影響が満ちている。

(詩作の例)

少なくとも一節の偈頌中に何らかの比喩を示す必要がある場合でも、インドの河[29]、山、土地、花などの名ばかりが現れる。例えば、

ビンドゥヤ山のごとく輝く御身、
ガンガーの流れのごとく清らかで無垢な御言葉

と詩作したなら、素晴らしい偈頌とみなされうる[30]。〔しかし〕

マジェポムラ山[31]のごとく輝く御身
マチュ河[32]のごとく淀みない御言葉

と詩作したなら、句の初頭音が揃っているなど、悪くはないのだが、笑い種となる詩感[33]になること云々である。

（著作姿勢の表明）

いつでも同様の話はたくさんあるため、時にはインドのありきたりのもの[34]について、各々確認することなく、憶測で[35]珍しい話をたくさん記す人々さえいる。

Z3　通常、このようなことは専ら、目で見て耳で聞いたことを通じてのみ判断するべきことゆえ、知れば学者となり知らねば愚者となる訳ではないが、知ったかぶりをすれば嘘つきとなることは[36]言うまでもない。さらに場合によっては、要点各々を理解している者でも間違いを犯してしまうことさえ多々あるので、真相を知ることがあったならば[37]必ずや意義深いこととなるはずである。

だから私[38]は様々なインドおよびチベットの地を散策したときに見聞した限りのあらゆる学問的収穫をひとつにまとめ上げて、憶測で決めつけることや、大衆を喜ばせるための根拠のないたいそう珍しい物語を記すことや、他人の顔を立て過ぎて本当の話すら語る勇気なく自分のツァンパ袋〔すなわち食い扶持〕を守るために[39]あらゆる是非の違いを無視して「思慮深い人」(jo bzang)という名を期待するなどのことは止めて、心の真っ直ぐな[40]有識者だけのために、普通の話のまま〔誇張無く〕得られた限りの知見を適宜折り込んで一冊の本にしてみようと思う。

他人の話と〔自分の話が〕矛盾する、と杞憂ばかり抱いてると、知恵を広げうるような考えさえをも生みだすことがない。〔一方〕「これも間違い、それも間違い」云々と語り公正の立場をとるなら、あらゆる階層の多くの人々の御心においてあしらわれることとなり、自分の生活手段などをどれほど損なうことになってしまうかについて[41]、私はチベットの国民性と土地柄に慣れ親しんでいるゆえ、悉く知り尽くしているのだけれども、お構いなしに書きますので、心狭きものたちが恨むこ

となきよう、重ねて御願い申し上げます。

Z 4　愚者を驚かす大袈裟な話や
偉人をおだてるへつらった言葉や
信仰の嘆息を引き起こす話を
遠ざけて公正な道に入ろう[42]。

以上、初発心。

[1 出発年と暦算方法]

さて32歳となった第16ラプチュンの、きのえいぬの年(1934年)、私はインドに出た。その年はスリランカ上座部の人々の主張するところの仏滅後2476年である。近年、仏教が新たに流布した外国〔すなわちロシアや西欧〕でもこの暦が基準とされているようであり、歴史が求め易いなどの必要性もあるので、後述の王統などの〔解説〕箇所でも[43]、仏滅による年代計算についてはこれ〔上座部の説〕を採用する。

法王サキャパンディタ(1182-1251)が[44]、「声聞部派の者たちは、仏誕と金剛座の仏像建立〔年〕の2つを誤解したうえで仏の誕生年代を計算しているので信頼できない」と仰っていることも、甚だ軽蔑すべき話である。

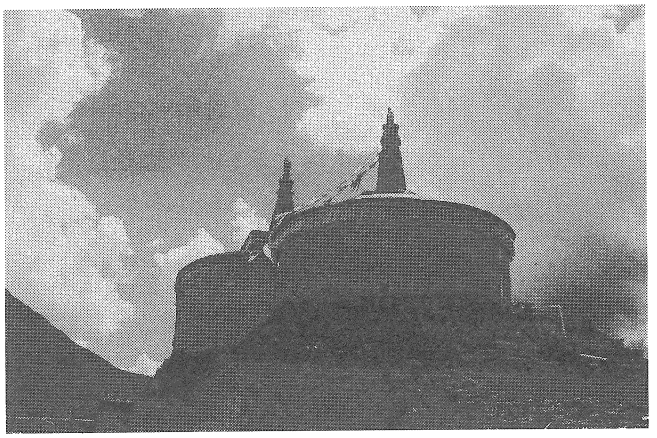
[2 ラーフル・サーンクリッティヤーヤン]

さて私は幼少より、かのインドの国に一度は行けたらと思うことが度々あった。ウー地方に着き、デプン寺にて7年ばかりが過ぎたとき、インドからパンディタ・ラーフルという方がチベットにやって来た。その方に出会い、〔インドへの同〕行を強く勧められて、宿願が叶い、出発した[45]。そして、最初にパンディタと我々[46]は
Z 5　ペンユル('Phan yul)とレディン(Rwa sgreng)寺などへ巡礼に行った。ついでにパンディタから直接にサンスクリットも少し学び始めた。彼にはお金もたくさんあって、チベット語はおよそ7歳の子供程度のことは御存知であった。ラサの貴族[47]による支援も良かったお陰で、寺院などの供養の対象(nang rten)を詳しく見ることができた。

[3 ペンユル地方]

かのペンユル[48]はラサの谷と、或る山脈の相互[49]にあるが、古い寺院(gdan sa)

はラサよりもむしろその地により多いと思われる。上部ペンユル('Phan stod)というのは、遊牧地のように広大で心地よい場所である。ランタン(Glang thang)[50]、ポト(Po to)[51]、ダギャ(Brag rgyab)[52]などのカダム派の有名な寺院は、たいていその谷の始めと終わり辺り(mgo mjug tsam)[53]にあるようだ。それらカダム派の古刹は全て、およそ仏塔によって満たされているようである。インドでも「聖仙の落ちた地」(サールナート)やナーランダー寺院遺跡などにおいて仏塔は大小数え切れない程あるので、〔それに倣ったカダム派古寺の伽藍様式は〕昔の伝統そのままである。



（ランタン寺の仏塔）

[4 ギェーラカン]

[4.1 略史]

それら全寺院の内、最古のギェーラカン(rGyal lha khang)[54]というのは、上部ペンユル('Phan stod)にあり、それはグー翻訳師('Gos lo tsa ba gZhon nu dpal, 1392-1481)が「仏教の根本となった四大基盤」と仰ったものの一つであり[55]、ラチェンポ(Bla chen po dGong pa rab gsal, 953-1035)の直弟子であるルメー(Klu mes Shes rab tshul khrims)[56]の弟子、シャン・ナナム・ドルジェワンチュク(Zhang sNa nam rDo rje dbang phyug, 976-1060)[57]によって建立されたものであり、〔その創建は〕ダルマ〔すなわちランダルマ王〕が破仏を行ってから、113年ほど後のことであるので、チベット仏教後期伝播期(phyi dar)最初の基盤に位置付けられる。

[4.2 弥勒像]

本堂(gtsang khang)の奥部屋には大弥勒像[58]が〔あり〕、経帙は経木などを欠き、

壁の如くに天に届くばかりに〔山積みにされて〕ある[59]。似たものはレディン寺やサキャ寺などにもある。それらの経帙は全て非常に古い年代の旧字であり、旧字の字形などの様相については、後でまとめて説明しよう[60]。

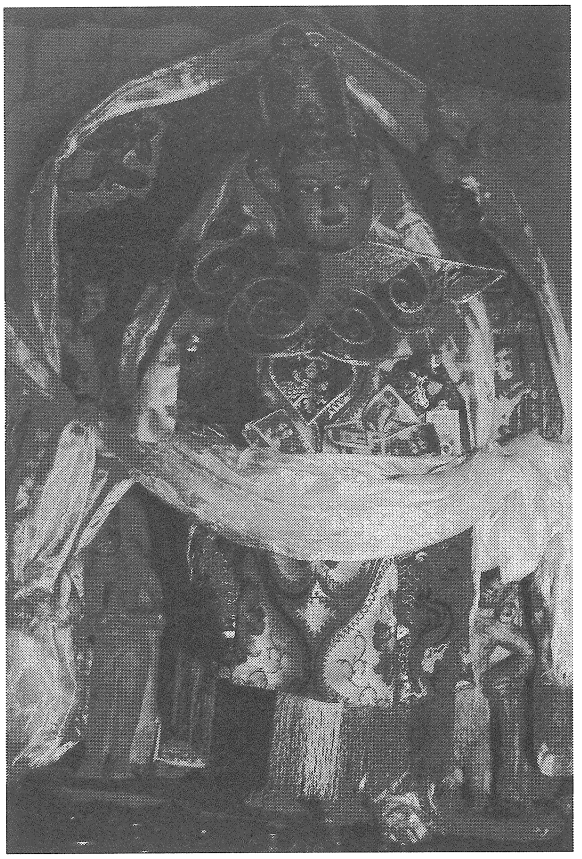
Z 6　その本堂の一隅にはインド様式に違いない弥勒主従三尊の石像で、人の背丈に至らない程のものがある。パンディタは見てからたいそう驚き、「これはインドから運ばれてきたものだ」と言った。しかし、〔灯〕火を持ち上げてよく見ると、光背に、

最上の礼拝対象であるこの弥勒像は
最上の施主ツァン・ドクンツェ(gTsang rdo dkon brtsegs)が
場所の中でも最上なる〔地〕に旗印として建立した。ここに、
最上の成果である最勝菩提がえられますように。
oṃ me ha ra na hūṃ[61]

とある。従ってその仏像はチベットにおいてインドの仏師がお造りになったように思われる[62]。

この〔石像の〕偈頌にはスンデン修辞法[63]のようなものがある。このようなものはしばしば古代の碑銘などにもあらわれる。「オーム」字に長音記号を記すこと[64]について、学者たちは何度も非難したが、たいていの古代の旧綴り字にあらわれ、概して以前はインド語の発音の通りにあらわれたもの〔すなわち発声された通りのもの〕をチベットの文字に書き取ることだけをしていたのである。「ヴァジュラ」(vajra)などについても「バザル」('ba' 'dzar)などと、或る翻訳師の御名前が末尾に明記される写本にも表記されるので、サンスクリットを整然とインド文字の通りに〔チベット文字で〕書くことが許容されたのは、後の時代に学者たちがなさったことのようである。ところが「プラジュニャー」(prajñā)など〔の語〕をインド文字の通りに綴ると、現在の発音ではチベット語の〔通常の発音方法の〕例に従って「タギャ」となってしまう。古代の表記ではたいてい「パルギャ」(par 'gya)などと綴っていたので、発音に際してそのほうが良いことは明らかである。しかしこれに関する考察は後述したい[65]。

Z 7　インドの鋳造仏や仏画などはチベットの古寺において、いまなお無尽蔵にあるが、インド様式の石仏像はこれ〔すなわち上記の弥勒石像〕以外には見当たらない、とパンディタは言っていた。



（ギェーラカンの弥勒石像）

［4.3 寺院の立地］

ギェーラカンは南の山の麓にある。近くには、現代の寺院用地として適した丘もあるのだが、そこには建てられておらず、平地の中心にある。同じく、概して、昔の〔吐蕃時代の〕法王たちが建立なさったものや仏教後伝期初頭に建立された僧院(dgon gnas)やお堂(lha khang)は通常、平地だけにあり、後代になって次第に、あらゆる僧院は山頂に向けて上へ上へと登っていったようである。インド中部では山が小さいため、ナーランダー寺や大菩提寺〔すなわちブッダガヤ〕などの僧院は全て平地にあったという類のことを模範にしたと思われる。

一方、インド人たちは〔立地条件のよい〕山や丘が得られたとき、山の王、某などを呼び寄せ、〔山〕上にお堂を建立することなどが大切とされていたようであり、ヴィクラマシーラ寺院もガンジス河岸の小高い岩の上にあり、その地方ではガンジス河の中洲の小さい岩山や河岸の山との２つ以外に〔山や丘などは〕ない。サパン

が「霊鷲山は聖地〔インド〕の大山なり」と仰ったこと[66]はもっともである。ただし、かつて「聖地インド」というと、マドゥヤデーシャ(yul dbus)だけを〔指して〕言っていた。さもなくば〔現在のインド領には〕ビンドゥヤ山によって分断された南方と東西の海に面した地方に〔霊鷲山以外の〕大山はたくさんある〔のでサパンの言が明確さを欠くことになろう〕。

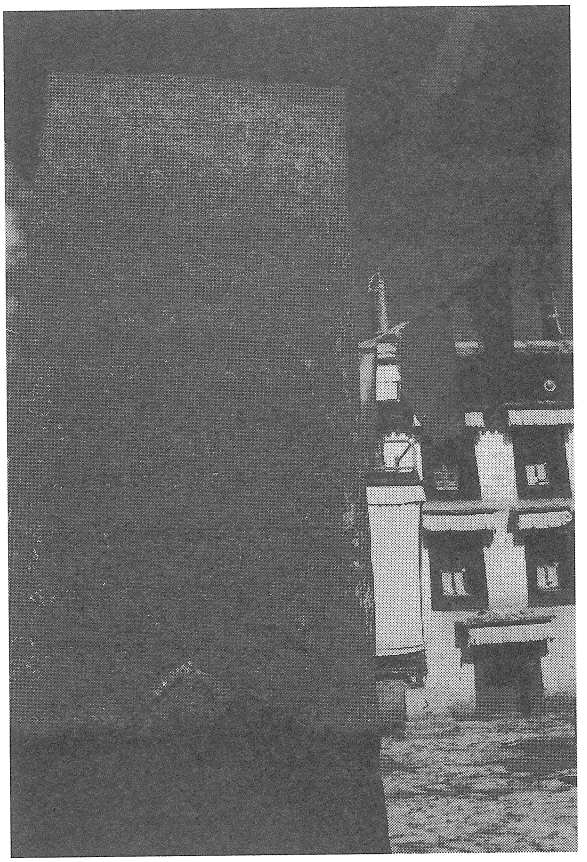
［4.4 石碑］

ギェーラカンの入り口には四面の石碑で人の背丈程のものがあり、〔その〕中ほどの四方に金剛杵・宝珠・蓮華・羯磨の印〔が各々刻印されており〕、東面では下方へ向かって、

Z 8　〔正法の伝統を建てるに際して、概して今日、〕[67]徳行に専念したり[68]、善行に倣ったりする者が少ないので[69]、三宝に帰依する人々は、主尊として[70]仏を受け入れ、意見をひたすら法に委ね 、最上の見解を学び、言動穏やかに、暮らし清く、あらゆる行いを法と結びつけ、皆意見を一致団結させ、〔身口意〕門の管理を各自引き受け、悪口を止め排除し、真実の話を積極的に受け入れる。この十を実行したなら[71]、今生と来世との両方で安楽となるので、以上の十句を達成し、[72]

これより下側は一行ほど破損しているが、はっきりと「これを忘れずに記憶するべし」などとある[73]。その下にも数行あるが読めない。〔銘文中の〕「概して今日」(spyi deng sang)の spyi という語にも、〔spyir と綴らずに〕添後辞 ra を欠いており、chig〔という綴り方〕なども、こ〔の旧綴り〕だけのようである[74]。〔上掲の銘文は〕この印「 ― 」が付された箇所で各行が終わっている。非常に古い文字においてはイ音母音記号(gi gu)の反転字がたくさんあらわれる〔が、〕ここにはそのようなものもない。

この石碑はラマか王かいずれのものかわからない〔が、銘文中の〕「建立に際して」という威勢[75]と、「〔身口意〕門の管理を各自引き受け、悪口を止め排除し」云々に基づくと、〔願望の程度から推定して〕王のものらしく、そうであればランダルマ(khri dar ma)の甥であるタシツェク(bKra shis brtesgs)や、その息子のウデ王(mNga bdag 'od lde)[76]などのものである可能性がある。



（ギェーラカンの石碑）

またそこ(ギェーラカン)において、ある中庭には別の石碑があるが、当日は住持(khang bdag)が他所に行ってしまっており、門が開かなかった。ペンユルのどこ
Z9　そこに、さらに石碑が一つ二つあるという。〔我々の〕巡礼が忙しくなく、それらを写し取ることができたなら実に良かったのだが。ラサの石碑の写しなどについては、後でチベットの王統の発見について多少記そうと思うので、〔ここに書かずとも〕その章に書くならば事足りるだろう。

チベット語テクスト

རྒྱལ་ཁམས་རིགས་པས་བསྟོར་བའི་གཏམ་རྒྱུད་གསེར་གྱི་ཐང་མ་ཞེས་བྱ་བ།
ཡང་དག་པར་རྫོགས་པར་སངས་རྒྱས་བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཞབས་ཀྱི་པདྨ་ལ་གསོལ་གྱས་པ་ཚེན་པོས་ཕྱག་འཚལ་ཞིང་སྐྱབས་སུ་མཆི་འོ། །

［冒頭偈］ (H 3, Z 1)

ཟབ་གསལ་ཤེས་རབ་འོད་ཀྱི་འཁོར་ལོས་མུན་པའི་འཇིག་རྟེན་འཇིག་པར་མཛད་དེ། །
རྣམ་ཐར་ཞི་བའི་ཏིང་འཛིན་ཞབས་ཀྱིས་སྲིད་པའི་རྩེ་མོ་མངོན་པར་མཁན། །
གྲོས་པའི་གྲྭན་ཀྱིས[1]བསྟུད་པ་ཡོངས་དག་ཏུ་མེད་མཁའི་ཐུགས་མངའ་བ། །
དཔལ་ལྡན་འཕགས་པའི་ཉི་མ་དེ་ཡིས་ཁྱོད་ལ་དགེ་ལེགས་ཚར་དུ་བསྟེལ། །

ཁ་བ་ཅན་ན་ཕྱོན་ཀྱི་ཁྱོལ་བཟང་ལས། །[2]
འོངས་པའི་ཡ་རབས[3]རྣམ་འགྲུར་གང་མཐོང་བ། །
འཕགས་ཡུལ་གྱི་བོད་གྱི་གསུམ་ཀྱན་ཐུགས་ཀྱི། །
གཟུགས་བརྙན་འཕོས་པའི་རི་མོ་བཞིན་དུ་གནས། །

དེའི་ཕྱིར་གནའ་རབས་མཁས་པའི་གཞུང་ལུགས་ལས། །
དོན་ཀྱི་རོ་ཆེས་ཚོར་བ་དེ་དག་ལ། །
ཕྱོངས་འདིའི་གནས་ཚུལ་ཞིབ་པར་གྲྀང་བས་ཀྱང་། །(Z 2)
ཐོས་པའི་ཡན་ལག་རྫོགས་ལ་ཕན་མཐོང་ནས། །

མཐོང་ཐོས་དབང་པོའི་ཡུལ་དུ་མ་ཀུར་པས། །
ཁྱིམ་ཀྱི་མལ་དུ་དཔྱད་པས་མི་ཤེས་པའི། །
ཕྱ་རགས་དོན་ཀྱི་ཁྱད་པར་ཇི་སྙེད་ཅིག།
རྣམ་གསལ་དཔེ་ལྟ་ལམ་ནས་འདིར་བཤད་བྱ། །

［序文］
（チベットにおけるインド文化の影響） (H 4.7, Z 2.6)

དེ་ལང་རང་རིའི་ཡུལ་འདིར་རྒྱལ་བློན་བྱང་ཆུབ་ས་སྐམས་དཔལ་རྣམས་ཀྱི་ཐུན་ཕྱོས་ལ་བརྟེན་པས། གང་ནས་རྒྱལ་བསྟན་བོད་དུ་ཐྱོན་པའི་གནས་ཁྱད་པར་ཅན་རྒྱ་གར་འཕགས་པའི་ཡུལ་འདི་ལ་མཆོག་དམན་བར་མའི་སྒྲ་བོ་ཀུན་ཀྱིས་དང་ཞེན་གྱབ་པ་ཚང་མེད་པ་ཡོད་གཤིས། རང་རིའི་མཁས་པ་རྣམས་ཀྱི་རྣམ་དཔྱོད་ཀྱི་འཆར་ཚུལ། ཆོས་པའི་ཐྲིག་སྟངས། ཆས་དང་། ཆོ་ག་སོགས་སྐོ་གསུམ་ཀྱི་ཁྱད་པ་ཐམས་ཅད་ལ་ཏིལ་ལ་ཏིལ་མར་ཀྱི་ཚུལ་དུ། རྒྱ་གར་བའི་ཤན་ཀྱིས་ཁྱབ་ནས་ཡོད་ཅིང་།

---

[1] Z: ཀྱི [2] Z: ཁ་བ་ཅན་ན་དམ་པའི་ཆོས་ལུགས་ལས། ། [3] Z: རབ

（詩作の例）　(H 4.14, Z 2.12)

མཐའ་ནི་[4]ཚིགས་བཅད་དུམ་རེའི་ནང་དུ་དགེ་འཕགས་ཚེའང་ཆུ་གར་གྱི་ཆུ་བོ་[5]རི་ལྟར་མེ་ཏོག་སོགས་ཀྱི་མིང་ཁོ་ན་འོངས་པ།　དགེར་ན།

　　འབིགས་ཕྱིད་རི་བོ་ལྟ་བུར་[6]བཏོད་པའི་རྒྱ། །

　　གཙའི་ཆུན་ལྟར་དག་ཅིང་དྲི་མེད་གསུང་། །

ཞེས་སྨྲར་ཚེ་ཚིགས་བཅད་ལེགས་པ་ཞིག་ཏུ་བཀྲང་ཐུང་བ་དང་།

　　མ་ཀུལ་སྦོམ་ར་བཞིན་དུ་བཏོད་པའི་རྒྱ། །

　　མ་ཆུ་བཞིན་དུ་ཆུན་ཆད་མེད་པའི་གསུང་། །

ཞེས་སྨྲར་ཚེ་ཚིགས་གི་ཐོག་མ་སྒྲ་མཚུངས་སུ་སོང་བ་སོགས་མི་ལེགས་པ་མི་འདུག་ནའང་།　བཞད་གད་སློང་བའི་ཐུན་སུ་འགྱུར་བ་སོགས་ཡིན་ལ།

（著作姿勢の表明）　(H 4.21, Z 2.19)

རྒྱ་དུ་སྒྲོས་དེ་རིགས་མང་སྤྱབས[7]ཀྱིས།　སྐབས་འགའ་ཞིག་ཆུ་གར་བའི་དངོས་ཚས[8]དཀྱུས་མ་ལྟ་བུ་རེ་ངོས་མ་ཟིན་པའི་དབང་གིས།　ཚོད་འཛིག་གིས[9]མཚར་གཏམ་མང་དུ་བྱིས་པ་སོགས་(Z 3)ཀྱང་ཡོད་ཅིང[10]། ལར་འདི་རིགས་ཟློས་ཕལ་ཆེར་མིག་གིས་མཐོང་བ་དང་།　ཟ་བས་ཐོས་པ་ཁོ་ནས་ཐག་གཅོད་དགོས་པ་ཞིག་ལས[11]། ཤེས་པས་མཁས་པར་འགྱོ་བ་དང་།　མ་ཤེས་པས་བླུན་པོར་འགྱོ་བ་ཞིག་ནི་མ་ཡིན་ན་ཡང་། ཏློམ་པས[12]སྒྲས་ན་ཇུན་མཁན[13]དུ་འགྱོ་བ་ནི་སྒྲ་མི་དགོས་ལ། ངེར་མ་ཟད་སྐབས་འགར་གནད་ཆེན་པོ་རེ་ཞོ་བ་ཡང[14]ཆོར་བའི་སྐྱོན་ཏུ[15]སོང་བ་ཡང་མང་བས། ཇི་ལྟ་བ་བཞིན་ཤེས་པ་ཞིག་ཐུང་དོན་ཆེན་པོར་འགྱུར་ངེས།

དེའི་ཕྱིར་ཕན་བུ་ཆུ་བོད་ཀྱི་ཡུལ་གྱུ་དུ་མར་འཕྲུལས་པའི་སྐབས་གང་མཐོང་ཞིང་ཐོས་པའི་རིགས་གནས་སྐོར་ཀྱི་བློ་བསྐྱེད་ཅི་ཡོད་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་བསྡུས་ཏེ[16]། འོལ་ཚོད་ཀྱིས[17]ཡིན་ཐག་བཅད་པ་དང་། ཝང་པོ་ཞིག་ལ་མཁུ་བ་བསྐྱེད་པའི་སྨྲད་དུ་ཁྲང་ས་མེད་ཀྱི་གཏམ་ཆུད་ཆེས་མཚར་མཚར་བ[18]དག་བྱེ་བ་དང་།　གཞན་ཀྱི་ངོ་བསྡུད་དག[19]སྟེ་གཏམ་བདེན་པ་ཙམ[20]ཡང་སྒྲ་བའི་ཐོབས་པ་མེད་པར་རང་གི་ཚམ་ཁྱག་བསྡུད་བའི་ཆེད་དུ[21]ཡིན་མིན་ཀྱི་དཔྱ་བས་ལ་ཐམས་ཅད་བཏང་སྟེ་མས་སུ་བཞག་ནས་ཇོ་བཟང་གི་མིང་ལ་རེ་བ་སོགས་དོར་ཏེ། ཤེས་རབ་ཅན་ཀྱི་སྒྲུས་བྱུགས་ཀུ་བོར་གནས་པ[22]འགའ་ཞིག་ཁའི་ཆེད་དུ་དཀྱུས་མའི་གླེང་མོ་བཞིན[23]གང་ཟེད་པ་སྐབས་སྐབས་སུ་བཅུག་སྟེ་གླེགས་བམ་ཞིག་ཏུད་པར་འདོད་དོ། །

(H 5.20, Z 3.15)

གཞན་ཀྱི་ཐུགས་དང་འགལ་ཀྱིས་དོགས་པའི་ཞུམ་པ་ཆེར་ཐུས་ཚེ།　ཤེས་རབ་སྒེལ[24]ཆུས་པའི་ཁོ་བ་ཡང་མི་

---

[4] H: ཐ་ན་　[5] Z om. ཆུ་བོ་　[6] H: བཞིན་དུ་　[7] H (em.): ཟློ་བས་, H Z: ཟློ་བས་　[8] H: ཡོ་ཐུད་　[9] H: དོན་མེད་ཀྱི་　[10] H: ལ་　[11] H: ཞིག་ཡིན་པས་　[12] Z: འོལ་ཚོད་ཀྱིས་　[13] Z: ཇུན་　[14] em., H Z: དང་　[15] H: ཏུ་　[16] H: ནས་　[17] Z: ཀྱི་　[18] Z om. བ་　[19] H: ཏུགས་　[20] H om. ཙམ་　[21] Z om. རང་གི་ཚམ་ཁྱག་བསྡུན་བའི་ཆེད་དུ་　[22] Z om. ཐྲོ་གཟུ་བོར་གནས་པ་　[23] H: བཞིན་ཏུ་　[24] H: འལེལ

བསྒྲེད་[25]ཅིང་། འདི་ཡང་ཆོར་དེ་ཡང་ཆོར་སོགས་སྒྲས་ནས་དང་པོའི་ལུགས་སུ་བྱས་ནི་ཚུང་མང་པོའི་ཐུགས་ལ་ཐོག་བཟློས་སུ་འགྱོ་ཞིང་། རང་གི་འཚོ་ཐབས་སོགས་ལ་ཅི་ཙམ་གཅོད་པར་འགྱུར་བ་[26]ཁོ་བོ་བོད་ཀྱི་མི་རང་ཡུལ་རང་ལ་ཆུས་ཡོད་པས་ཤིན་དུ[27]ལེགས་པར་ཤེས་མོད། ཇི་མི་སྟམ་པར་བྱེ་བ་ལགས་པས་སེམས་ཚུང་རྣམས་འགོན་དུ་མི་འཇིན་པར་གསོལ་བ་ལན་བཏབ་འདི་བས་པ་ལགས། (Z 4)

ཏྲོན་པོ་ངོ་མཚར་བསྒྲེད་པའི་ཉར་ཀྱི་གཏམ། །
ཆེན་པོའི་ངོ་བསྟོད་[28]བཅུགས་པ་གཅམ་བུའི་ཚོག།
དད་པའི་འཁྱུན་བུ་སྦྱོང་བའི་སྒྲུང་གཏམ་དག།
རིང་དུ་སྒང་ཏེ་དང་པོའི་ལམ་དུ་ཞུགས། །
ཞེས་བྱ་བ་ནི་ཐོག་མའི་སེམས་བསྒྲེད་པའོ། །

［1 出発年と暦算方法］ (H 6.11, Z 4.4)

དེ་ལ་རང་ལོ་ཐོ་གཉིས་སུ་ཐོན་པ་བོད་ཀྱི་རབ་ཏུང་བཅུ་དྲུག་པའི་ཤིང་ཕོ་ཁྱིའི་ལོ་ལ། ཁོ་བོ་ཆུ་གར་དུ་བཏོལ་ཅིང་། ལོ་དེ་ནི་སིངྷ་ལ་པའི་[29]གནས་བརྟན་སྟེ་པ་དག་གི་བཞེད་པའི་[30]སངས་ཆུས་ཚུ་ངན་ལས་འདས་ནས་ལོ་ཉིས་སྟོང་བཞི་བཅུ་དོན་དྲུག་པ་ཡིན་འདུག་ལ། དེང་སང་བསྟན་པ་གསར་དུ་དར་བའི་ཆུལ་ཁམས་གཞན་དུ་ཡང་ལོ་ཚིགས་འདི་ཉིད་ཚ[31]འཛིག་པར་སྟང་ཞིང་ལོ་ཆུས་འཚོལ་སྨྲ་བ་སོགས་ཀྱི་དགོས་པ་ཡང་འདུག་པས། འོག་དུ་ཆུལ་རབས་སོགས་ཀྱི་སྐབས་གང་དུ་ཡང་སྟོན་པ་འདས་ནས་བཀྲང་བའི་ལོ་རྣམས་ལ[32]འདི་ཉིད་གཟུང་བར་བྱའོ། ། ཇི་ས་སྐུ་བཏྲི་ཏས[33]ཉན་ཐོས་སྟེ་པ་རྣམས་ཀྱིས། ས་ངས་ཆུས་འཕྲངས་པ་དང་། ངོ་ཇི་གདན་ཀྱི་སྐུ་བརྟན་བཞེངས་པ་གཉིས་ནོར་ནས་སྟོན་པའི་འཕྲང་ལོ་ཅིས[34]པས་ཡིད་བརྟེན་མེད་པར་གསྲངས་པ་ཡང། ཏ་ཅང་བརྟས་ཆེ་བའི་གཏམ་ཞིག་ཀོ།

［2 ラーフル・サーンクリッティヤーヤン］ (H 7.2, Z 4.16)

དེ་ཡང་ཁོ་བོ་གཞོན་ནུ་ཞིག་ནས་ཆུ་གར་ཀྱི་ཡུལ་དེར་ལན་གཅིག་སྐེས་ན་སྟམ་པ་ཡང་ཡང་ཡོད་ཅིང། དབུས་སུ་སྐེས་ནས་འབྲས་སྦྱངས་སུ་ལོ་བདུན་ཙམ་སོང་བ་ན། ཆུ་གར་ནས་པཎ্ཌི་ཏ་དུལ[35]བ་ཞིག་བོད་དུ་བྱོན་པ་དང་ཕྲད[36]ནས་འགྲོ་བའི་བསྐུལ[37]མ་བཏབ་པ་བཞིན་འདོད་ཐོག་ཏུ་སྐྱེན་ཏེ་ཆས་སོ། །

དེ་ཡང་ཐོག་མར་པཎ্ཌི་ཏ་ངང་ངེད་ཅག་འཕན་ཡུལ་དང། ར་སྒྲེང་སོགས་སུ་གནས་སྐོར་ལ་སོང། ཞར་ལ་པཎ্ཌི་ཏའི་ཐད་(Z 5)ནས་ལེགས་སྦྱར་ཡང[38]ཕྱན་བྱ་བསྐྱབ་པའི་འགྲོ་ཚུགས། ཁོང་ལ[39]དཔྱལ་ཡང་མང་པོ་འདུག་ཅིང། བོད་སྐད་ཀྱང་ཕལ་ཆེར་ཕྱིས་པ་ལོ་བདུན་པའི་ཚོད་ཙམ་མཁྱེན། ལྷ་ས་པའི་སྐུ་དགས་འགའ་རེས་མགོ་འདྲེན་ཀྱང་བཟང་བར་བརྟེན་དགོན་སྟེ[40]རིགས་ཀྱི་ནང་རྟེན་རྣམས་ཞིབ་ཏུ་མཐལ་ཆུ་ཕྱུང།

---

[25] H: སྒྲེད་ [26] རང་གི་འཚོ ..., Z: རང་ཉིད་ཚོགས་ཆུབ་དང། བརྟས་སྟོང་ཀྱི་འབེན་དུ་ཕྱས་ནས་ཐོ་དགོས་པ། [27] Z om. ཤིན་དུ། [28] H: བསྟང་ [29] H: ཞིང་གཡའི་ [30] Z: པས། [31] Z: ཚུ། [32] Z: བཀྲང་བ་ཐམས་ཅད་ལ [33] Z: བོད་ཀྱི་ཆེན་པོ་འགའ་ཞིག་གིས། [34] H: བཅྱིས། [35] H: ར་ཏུ་ལ [36] H Z: འཕྲད། [37] H: ཕྱུལ [38] H: ཀྱང [39] Z: ཁོང་པ་ལ [40] H: དགོན་ཐེ་ཏ

[3 ペンユル]　(H 7.12, Z 5.4)

འཕན་ཡུལ་དེ་ལྟ་སའི་ལུང་པ་དང་། རི་ཆུང་གཅིག་གི་ཕན་ཚུན་དུ་འདུག་མོད། སྟོན་ཀྱི་གདན་ས་ལྟ་ས་ལས་ཀྱང་ཕྱོགས་དེ་ནས་བ་སྟམ་ཕྱེད།[41] འཕན་སྟོང་ནི་འབྲོག་ས་ལྟ་བུ་ཁ་ཞེང་ཆེ་ཞིང་ཟླས་དཀར་བ་ཞིག་འདུག། གླང་ཐང་། ཝོ་ཏི། བྱག་ཆུ་ས་ཚོགས་བཀའ་གདམས་པའི་དགོན་པ་མིང་ཆེ་ཆེ་ཕལ་ཆེར་ལུང་པ་དེའི་མགོ་མཇུག་ཅམ་ལ་སྟང་།[42] བཀའ་གདམས་པའི་དགོན་རྡོང་དེ་ཀུན་ཕལ་ཆེར་མཚོད་རྟེན་ཀྱིས་གང་བསྟད་པ་ལྟ་བུར་[43]འདུག་ཅིང་། ཆུ་གར་དུ་ཡང་དང་ས্ལོང་ལུང་བ་དང་ནས་ལན་དའི་[44]དགོན་ཤལ་རྣམས་ན[45] མཚོད་རྟེན་ཆེ་ཆུང་གང་ས་ཀྱི་མི་ལོང་བ་ལྟ་བུ་འདུག་པས་ཐོན་ཀྱི་སྲོལ་དེ་ཀ[46]ར་ཡིན་འདུག།

[4 ギェーラカン]
[4.1 略史]　(H 7.20, Z 5.12)

དགོན་ཐེ་དེ་ཀུན་ལས་རྡོང་ཨོས་ཆུལ་ལྟ་ཁང་བྱ་བ་འཕན་ཐོང་དུ་འདུག་ཅིང་། དེ་ནི་འགོས་ལོས་ས་ཁས་ཆུས་བསྟན་པའི་ཙ་བར་གྱར་པའི་གནས་གཞི་ཆེན་པོ་བཞི་ཞེས་གསུངས་པའི་ཡ་ཀྱལ་ཏེ། ཐུ་ཆེན་པོའི་དངོས་སྦོ་བ་ཀུ་མེས་ཀྱི་མཁན་བུ་ཞང་སྟ་ནས་ཏོ[47]ཏེ་དབང་ཕྱུག་གིས་བཞེངས་པ་ཡིན་ཅིང་། དར་མས་ཆོས་བསྟུབས་ནས་ལོ་བཀྲ་དང་བཅུ་གསུམ་ཅམ་ཀྱི་ཁོངས་སུ་ཡིན་པས[48]། བསྟན་པ་ཕྱི་དར་ཀྱི་དང་པོའི་གནས་གཞིའི་གྲས་ཡིན།

[4.2 弥勒像]　(H 8.5, Z 5.18)

གཙང་ཁང་སྐུ་ཏུ་ཐུམས་པའི་སྐུ་ཆེ་བ་ཞིག་དང་། གསུང་རབ་ཀྱི་གླེགས་བམ་གླེགས་ཤིང་སོགས་མེད་པར་ཅིག་པ་བཞིན་དུ[49]གནམ་ལ་ཐུག་ཐུག་ཏུ་ཡོད་པ། དེ་འདྲ་རྒྱེང་ས་སྐུ་སོགས་ན་ཡང་འདུག །གླེགས་བམ་དེ་ཀུན[50]ཆེས་གནའ་བོའི་དུས་ཀྱི་ཡི་གེ་རྣོང་མ་རང་དུ་འདུག་ཅིང་། ཡིག་རྣོང་གི་གཟུགས་སོགས་ཇི་ལྟར་ཡོད་པ་འོག་ཏུ་དགུས་གཅིག་ཏུ་འཆད་པར་(Z 6) བྱའོ། ། གཙང་ཁང་དེའི་ཟུར་གཅིག་ན་ཆུ་གར་བཟོ་ལུགས་འཕྲལ་མེད་ཀྱི་ཐུམས་པ་གཙོ་འགོར་གསུམ་པ་ཞིག་གི་ཇོ་སྐུ་མི་ཚད་མ་ལོང་ཙམ་འདུག །པཎ་ཊི་ཏས་མཐོང་ནས་ཆེས་ཏ་ལས་ཏེ་འདི་ཆུ་གར་ནས་འཕྲུར་ཡོང་བར་འདུག་ཟེར། འོན་ཀང་ཞུགས་མེ་བཏེགས་ནས་ཞིབ་ཏུ་བལྟས་པས། ཆུབ་ཡོལ་ལ།

　　མཚོད་གནས་དམ་པ་ཐུམས་པའི་སྐུ་གཟུགས་འདི། །
　　ཡོན་བདག་དམ་པ་གཙང་ཇོ་དགོན་བཟེགས་ཀྱིས། །
　　གནས་ཀྱི་དམ་པར་ཆུལ་མཚན་བཙུགས་པ[51]འདིར། །
　　འབྲས་བུ་དམ་པ་ཐུང་ཆུབ་མཚོག་ཐོབ་ཤོག།
　　ཚུགས་ཡོལ་ལ།

ཐུ་བ་འདུག །དེས་ན་སྐུ་དེ་བོད་དུ་ཆུ་གར་གྱི་བཟོ་བོ་ཞིག་གིས་བཞེངས་པ་འདུ། འདིའི་ཚོགས་སུ་བཅད[52] ཟུང་ལྡན་ནས[53]འདུ་བ་ཡོད་པ་དེ་འདུ་རྣ་ཏ་ཀུ་ནའ་དུས་ཀྱི་ཇོ་བཀོས་སོགས་ལ་འང[54]ཡོང་བ་ཞིག་འདུག །ཚུགས་ལ་རིང་ཆ་བྱིས་པ་ལ་མཱགས་པ་ཆུམས་ཀྱིས་བསྟེགས[55]མ་མང་དུ་ཐུས་མོད། གནའ་བོའི་བྱིས་ཆེང

[41] H: མང་བ་ཙམ་འདུག　[42] H: འདུག　[43] Z: བ　[44] H: ལེན་དུའི　[45] H: ན་ཡང　[46] Z: ཀ　[47] H Z (em.): ཏོ, Z: ཏ̀ཏ̀　[48] H: ཙམ་ནཡིན་པས　[49] གླེགས་ཤིང ..., H: ཇིག་པ་བཞིན་དུ་གླེགས་ཤིང་མེད་པར　[50] H: དེ་དག　[51] Z: པས　[52] H: ཚོགས་བཅད　[53] Z om. ནས　[54] H: ལ　[55] H: ཐེག

ཕལ་ཆེར་ལ་སྟང་ཞིང་། ལར་སྟོན་ནི་ཆུ་སྐད་གཏམས་ཅི་ལྟར་ཐོན་པ་ཅམ་བོད་ཡིག་ཏུ་བྲིས་པ་ལས་མི་འདུག་ཅིང་། བཤད་སོགས་ལའང་། འབའ་འཛར་སོགས་སུ་ཚོ་བ་འགའ་ཞིག་གི་མཚན་གཅན་དུ་གསལ་བའི་ཕྱག་དཔེ[56]འགའ་ལ་ཡང་བྲིས་འདུག་པས། ལེགས་ཐུར་གཙང་སང་ཆུ་ཡིག་ཇི་ལྟ་བ་བཞིན་བྲིས་ཚོག་པ་འདི་དུས་ཕྱིས་ཅ་ན་མཁས་པ་རྣམས་ཀྱིས་མཇད་པ་ཞིག་ཏུ་སྟང་། འོན་ཀང[57]པ་ཐུ་སོགས་ཆུ་ཡིག་བཞིན་བྲིས་པས་ད་ལྟའི་ཀློག་ལ་གོང་སྐད་ཀྱི་དཔེ་བཀག་ཐེ། ཏ་འགར[58]སོང་ཞིང་། གནའ་བྲིས་ཕལ་ཆེར་དུ་པར་འགྱ[59]སོགས་སུ་བྲིས་པས་ཀློག་ལ་ནི་དེ་ལེགས་པར་མཇོན་ནོ། ། འོན་ཀང་འདིའི་སྐོར་ཞིབ་མོ་ཞིག་འོག་ཏུ་བཤད[60]པར་བྱའོ། ।(Z 7)ཆུ་གར་སྐུ་ཕྲག་མ་དང་། ཐང་སྐུ་སོགས་བོད་ཀྱི་དགོན་རྩེ་རྣམས་ན་ད་དུང་ཡང[61]མཇོད་བས་གས་པ་བཞིན་དུ་འདུག་མོད[62]། ཇོ་སྐུ་ཆུ་གར་མ་འདི་ལས་གཞན་མ་མཐོང་ཞེས་པ་ཇི་ཏྲས[63]སྒྲས[64]ཡིན[65]འདུག།

[4.3 寺院の立地]　(H 9.13, Z 7.1)

ཆུལ་ལྷ་ཁང་དེ་ལྟོ་རིའི་ཁ་འདབས་སུ་འདུག་ཅིང་། ཁ་འགོར་ན་རི་ལྷོང་ད་ལྟའི་དགོན་ས་ལ་འོས་པ་ཡང་འདུག་མོད། དེར་མ་བཏབ་པར་ཐང་གི་དཀྱིལ་དུ་འདུག ।དེ་མཚུངས་ཐྲིར་བཏང་ཅམ་ལ་ཆོས་ཆུལ་གོང་མ་རྣམས་ཀྱིས་བཞེངས་པ་དང་། བསྟན་པ་ཕྱི་དར་གྱི་མགོ[66]ལ་བརྟེགས་པའི་དགོན་གནས་དང[67]ལྷ་ཁང་རྣམས་རྟག་ཏུ་ཐང་དཀྱིལ་ཁོ་ནར་འདུག་ཅིང་། དུས་ཕྱིས་རིམ་ཀྱིས་དགོན་གནས་ཐམས་ཅད[68]རིའི་རྩེ་ལ་ཡར་ཡར་འཕགས་པ་ལྷ་བྱར་འདུག ।ཆུ་གར་དབུས་ན་རི་ཕྱང་བས་ནལ་ལན[69]དང་། ཐུང་ཆུབ་ཆེན་མོ་སོགས་དགོན་གནས་ཐམས་ཅད་ཐང་ལ་ཡོད་པ་དེ[70]འདུ་ལ་དཔེ་མཇད་པར་སེམས། འོན་ཀང་ཆུ་གར་བ་རྣམས་རི་དེའི་རེ་རྩེད་ཆེ[71]རིའི་ཆུལ་ཡོ་གེ་ཞེ་མོ་དང་། ཆེ་ཞེ་མོ་ཞེས་འབོད་ཅིང་། ཐྲེང་དུ་ལྷ་ཁང་བརྟེགས་པ་སོགས་འགངས[72]ཆེན་དུ་ཐུས[73]སྟང་ཞིང་། ཕིཀ་ཤ་ཎི[74]ཡང་གཙའི་འཁྱམ་ཐབ་ཆུང་དུ་ཞིག་གི་ཐྲེང་དུ་ཡོད་ཅིང་། ཕྱོགས་དེ་ན་གཙའི་དབུས་སུ་ཐབ་ཆུང་དུ་ཞིག་དང་། འཁྱམ་ཀྱི་རི་གཉིས་ཁོ་ན་ལས་མི་འདུག ।ས་པཾ་ཀྱིས་ཐ་ཚོད་ཕྱང་ཡོ་འཕགས་པའི་ཡུལ་ཀྱི་རི་ཆེན་ཡིན་གས་ཤང་ས་ཡང་ཤིན་དུ་བདེན། འོན་ཀང་སྟོན་ཀྱི་ཆེ་འཕགས་ཡུལ་ཆུ་གར་ཐུ་བ་དེ་ཡུལ་དབུས་ཅམ་ལ་ཐུས་པ་ཐེ། གཞན་དུ་ན་རི་བོ[75]འབིགས་ཕྲེད་ཀྱིས་བཅད་པའི་ལྟོ་ཕྱོགས་དང། ཤར་ནུབ་ཀྱི་ཆུ་མཚོ་ལ་བཞུ་བའི་ཕྱོགས་ན་རི་ཆེན་པོ་མང་དུ་སྟང[76]།

[4.4 石碑]　(H 10.11, Z 7.20)

ཆུལ་ལྷ་ཁང་གི་ཐྲོར་ཏོ་རིང་གྲོང་བཞི་མ་མི་འགྲེང་ཅམ[77]ཞིག་འདུག་པའི་སྐད་ཕྱོགས་བཞིར། ཏོ་ཏྲ་རི་ཆེན་པཎ་ཆུ་ཁྱམ་ཀྱི་རི་མོ་དང་ཤར་ངོས་ནས[78](Z 8)མར་ལ།

(石碑東面上部銘文)

ཐུགས་པ་ལ། ཐྲི་དེང[79]ཁང་གི་དབས་སུ་ནི།-
དགེ་བ་ལ་གློ་གཅིག་ལེགས་པ-
ལ་ཁྲོས་མཐུན་པ་ནི་ཕྱང་ན། འོན་ཡང-

---

[56] H: བྲིས་ [57] H: འོན་ཡང་འདིའི་ [58] H: ཏ་ཀ[illegible] [59] H: འགྱ་ [60] H: འཆད་ [61] Z om. ད་དུང་ཡང [62] Z: སྟང་ཞེད་ [63] H: ཐ[illegible]ཏ [64] em., HZ: ཐ[illegible] [65] Z: ཡན [66] H: འགོ [67] Z om. དང [68] Z: དགོན་པ་རྣམས [69] H: ནལ[illegible] [70] Z om. དེ [71] Z: ཆ [72] Z: འགང [73] Z: ཐུས་ནས [74] H: ཕ[illegible]ཎ [75] Z om. རི་ཞོ [76] H: འདུག [77] H: ལ[illegible]ཅ [78] H: ན [79] Z: ཏ[illegible]

དཀོན་མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་འགྱོ་བའི་མྱི-
རྣམས་ཀྱིས་ནི། ལྷར་སངས་རྒྱས་གཟུང་། གྲོས-
ཕུགས་ཆོས་ལ་གཏོད། གཙོར་ལྷ་ཐུང་། ཆིག-
ཕྱོད་རལ་དུ་དབས། འཚོ་བ་གཙང་མར་བསྐྱོལ-
ཅེད་དགུ་ཆོས་དང་ཐུར། ཕྱི་གྲོས་གཅིག་དུ-
བཟློག། སྒོ་གཉིར་སོ་སོར་བླང་། ངན་གྲོས་དགག་ཏུ-
དགྱེང། བདེན་གཏམ་དང་དུ་བླང། འདིར་བཙུ-
ཅས་ན་འཚེ་འདི་དང་ཕྱི་མ་གཉིས་གར་བདེ་བར-
འགྱུར་བས། ཆོག་བཙུ་པོ་འདི་

འདི་ནས་མར་ལ་ཕྱིག་ཕྲེང་གཅིག་ཙམ་ཕོར་རེ་གས་ལ་བར། ཡིད་ལ་མ་བཏེད་པར་བཟུང་ཐུ་བ་སོགས་འདུག།[80] དེའི་[81]འོག་ཏུ་ཡང་ཕྱིག་ཕྲེང་འགའ་སྟང་མོད་བཀླག་ཏུ་མི་བཏུབ། ཕྱི་དེང་[82]ཝང་ཞེས་པའི་[83]ཕྱི་ལ་ཡང་[84]ར-
མཐའ་མེད་པ་དང་། ཆིག་[85]སོགས་ཀྱང་འདི་ཁོ་ན་བཞིན་འདུག །རྒྱས་[86]འདི་ - ཡོད་ས་ཕྱིག་ཕྲེང་རེ-
ཇོ་གས། ཆེས་ཆྱེང་མའི་ཡི་གེ་རྣམས་ལ་གི་གུ་ཕྱིར་ཡོག་མང་ཏུ་ཡོང་བ་འདི་ལ་དེ་འདྲ་ཡང་མི་འདུག །ཇོ་རིང-
འདི་བླ་མཉམ་ཀུལ་པོ་གང་གི[87]ཡིན་མི་ཤེས་པ་སྟང་ཞིང་། བཙུག་པ་ལ། ཞེས་པའི་ཏཱིཀ་ཅིག་ལ། ཕྱི-
གཉིར་སོ་སོར་བླང་། ངན་གྲོས[88]དགག་ཏུ་བཏུང་། སོགས་ལ་བལྟས་ན། ཀུལ་པོའི་ཡིན་མདོག་ཁ་ཞིང་।
དེ་ལྟར་ན་ཁྱི་དར་མའི་ཚ་པོ་བཀྲ་ཤིས་བཟེགས་དང་། དེའི་སྒས་མངའ་བདག་འོད་ལྡེ་སོགས་ཀྱི་ཡིན་སྲིད་པ-
ཙམ་མོ། ।[89]

གཞན་ཡང་དེར་ཆ་བ་ཞིག་གི་ནང་ན་ཇོ་རིང་གཞན་ཞིག་ཡོད་ཀྱང་། ཉིན་དེར་ཁང་བདག་གཞན་ཏུ་སོང་ནས་[90]
སྒོ་མ་ཕྱེས། འཕན་ཡུལ་ཁ་མེ་ཞིག་ན་ད་ཏང་ཡང་ཇོ་རིང་(Z 9)གཅིག་གམ་གཉིས་ཡོད་ཟེར། གནས་སྐོར-
བ་བྱེལ་བ་ཚུང་བ་འདྲ་བླང་ན་དེ་དག་ངོ་བཤུས་རེ་ཐུབ་ན་ཤིན་ཏུ་ལེགས། ལྷ་སའི་ཇོ་རིང་གི་ངོ་བཤུས་སོགས-
འོག་ཏུ་སོང་ཀྱི་ཕྱུལ་ངས་གསར་ཆེད་ཀྱི་སྐོར་ཤུང་ཟད་ཅིག་བྱི་འདོད་པས་སྐབས་དེར་བཀོད་ན་ཆོག།

[80] H adds གོང་གསལ་ལྟ་རྒྱས་རྣམས་ཇོ་རིང་གི་ཞེང་ཚད་ཡི་གེ་ཡིན་　[81] H: དེ་ནས་　[82] Z: ཏིང་　[83] Z om. པའི་　[84] Z om. ཡང་　[85] Z: ཆོག　[86] H: བླ་རྒྱས　[87] H: གི་ཡང་　[88] Z: འགྲོར་　[89] H: ཞིག་གོ།
[90] Z: ག-ཤེད་ཞིག་ཏུ་སོང་ནས

[ギェーラカンに関する補足資料]

(1. ホルカン著『ペンポ巡礼見聞録』より)[77]

〔1983年7月28日〕そこ〔すなわちトゥプテン・リンチェン氏の邸宅〕を出発して、ペンポのギェー村の病院と、その付近で、かつて地主であった、デルゲ・ケルサン・ワンドゥータンパの母の邸宅と、ギェー村のソワを経由して、ペントゥーのギェーラカンに到着した。チベットの第16ラプチュンの、きのえいぬの年(西暦1934年)に大学者ゲンドゥンチュンペーが、この土地を巡礼して(ギェーには12時半に到着し)、(p. 674)ラチェンポ〔ゴンパラプセル〕の直弟子、ルメーの弟子のナナム・ドルジェワンチュクが創建して、ダルマが破法して、113年が過ぎたと仰った[78]。

まずギェーラカンの境内では、ギェトゥー堂がちょうど修築されていた。そのお堂の宝物はなかった。老僧のジャンペールントクという方の話によると、このギェトゥー堂のナナム・ドルジェワンチュクの19番目の転生者は、ヤンゴン堂(yang dgon)の活仏である(彼は最近亡くなった)。初代〔すちなわナナム〕については、『祈願文』(gsol 'debs)の中に〔説かれている。すなわち〕釈迦牟尼が生きておられた時代に、息子と称された者[79]から〔始まり〕、ラトナダーサの父である王ペルデンジェ、カワ・ペルツェク、インドの自在者ニマジン、ナローパ、それからシャン・ナナム・ドルジェワンチュクとして〔転生して〕お生まれになった歴史が述べられている。

そして、ギェメー堂の建物は被害無く残っていたが、現在では修築する必要がある。そこにはカンキャ活仏という方がいらしたが、彼の活仏の起源については調査できなかった。その境内には、かつてゲンドゥンチュンペー師がお越しになったとき、東側のそこにある古いお堂に、ナナムの時代に建立された巨大な弥勒像があり、それは「ペントゥーの弥勒三兄弟」といわれるそのうちの真ん中のものであると仰った。

石碑と、人の背丈ほどある3体のインド製の石像〔に刻まれた〕誓願文の碑文を〔ゲンドゥンチュンペーは〕書写なさった。現在、そのお堂〔石造弥勒仏を収めるお堂〕は、文化大革命の時代に跡形なく破壊されて、その内側は(p. 675)雑草などで満たされていた。いまなお残る外側の門を、私は撮影した。ばらばらになった石碑の破片は一つにまとめられ、現在はギェトゥー堂の中庭に移されている。石碑の文字は、かつて書写されたものを閲覧できるので、そのまま、〔破壊によって〕欠損した〔文字〕を〔かつての書写にもとづいて、新たに修復した石碑に〕転写した。寺院

の裏山や、そこから連なる山裾にある二、三の仏塔は新たに造られたものである。

（２．チューペル著『雪山西蔵新巡礼記』より）[80]

ギェーラカン（ギェトゥー）: 別称ギェトゥーゴン、またはギェールク・テーラカン、シャンルク・テーセルギ・ラカン、など言い方はいろいろある。ローツァーゴン(パツァプ寺)からさらに道を経て３キロほどいくと、ラカン村中央でこのゴンパを参詣することができる。

このゴンパは1012年あたりにシャン・ナナム・ドルジェワンチュクが建立なさった。シャン・ナナムが初め、ニャムチェン・タンラの修行堂で修行なさっていたちょうどそのとき、熱風にかんして自在力を得たので、タンラの雪山が溶け、タンラ〔山神〕は獅子の乳を〔シャン・ナナムに〕１杯献上して、「あなたがここに居られますと私の雪山が溶けてしまいますので、どうか立ち去って下さいませ」とお願いした。(p. 179)それからシャン・ナナムは、修行堂で著述をしていたちょうどそのとき、1匹の烏が献供物としての鈴を現在の寺院がある土地の裏山の頂上に運んだので、「それでは私の寺院は、この地に立てよう」と仰り、先ず弥勒堂を建立なさった。ナムツォ湖の土地神ドルジェ・ユドンマもまたシャン・ナナムにトルコ石の破片を贈り、〔それは〕弥勒堂の柱の下にあると言われる。

シャン・ナナム・ドルジェは弥勒３兄弟像を建立なさったが、そのうち特に尊い弥勒は、「薩埵三衆」といわれる。「薩埵三衆」とは、かつてこの地に羊飼いが放牧に着たとき、ルグラ〔峠〕でひとつの巨大な岩が有る場所に来て、母羊が子羊に乳を与えている様子をみて、また戻ってきた時も同じ情景をみた〔ので、その〕ことをシャン・ナナム・ドルジェに申し上げた。するとシャンはその岩を割ってその中から１トゥほどの大きさの黄金の弥勒像が顕われた。その弥勒像を内奉供物(スン)として安置された〔ところの大弥勒像が〕一つ。また、他に類のない〔立派な〕弥勒を建立した〔のをあわせて〕２つ。弥勒像建立〔の儀礼〕をなしたあと、シャン・ナナムは弥勒像に溶け込んだので３つ〔。〕総じて「三薩埵をもつ〔弥勒像〕」といわれる〔「薩埵三衆」は〕そのように生じた。上述の授記をなした母羊の遺骨を納めた仏塔を建立なさり、それを「母羊仏塔」ともいう。その後、〔シャン・ナナムは〕現在の寺院を建立なさった。

かつての、36柱ある集会堂の〔中にある〕守護尊堂の中には主従三尊の〔ドルジェ・〕ユドンマと、ゴンチュ・ナムハと、カスン・ヤンゴンチューギェルがいた。ヤンゴンチューギェルというのは、ランダルマ王の時代に大臣タンカ・ペンチュンという

者が皮剥ぎをして、〔死後、〕悪魔として転生してペンポの下部に住み、人々にひどい害をなしていたところ、ジョワォジェ(アティシャ)が堅固に捕縛して、その寺院の守護尊として安置したといわれる。

集会堂の奥部屋の(p. 180)本堂(dri gtsang khang)内には、2層のカダム仏塔、真鍮製の薬師八仏、その脇に経堂がある。集会堂内には、真鍮の釈迦牟尼仏、大慈悲ある千手千眼などがおられたという。

かつては300人ほどの僧が善き修行をなさっていた。毎年、チベット暦3月8日から4月15日まで「ギュデギェ」(8部タントラ)の成就法の法会がある。「ギュデギェ」とは、一般的に4部タントラに、無量寿(ツェパメ)、一切知(クンリク)、大悲(トゥクジェチェンポ)、薬師(メンラ)をあわせた8の色砂曼荼羅の配列(gral 'go)が各々ある。

チベット暦4月14・15日各々に主尊ヴァジュラヴァイラバとゴンチュ・ハナムと〔他の〕守護尊のチャム(舞踊)があり、16日には布仏(刺繍タンカ)を掛けるなどの伝統がある。

現在は修復されているかつての集会堂の内では、新たに造られた仏像や、たくさんの古い壁画を参拝できる。寺院には石碑があるが、ジュンガル軍の時代、〔モンゴル人たちが〕弥勒像を破壊しようと企て、その頭を布で包んで置いたところ、髪の毛が生えてきたので驚き、寺院を壊さずに石碑も戻したといわれる。

またその寺院から歩いて下に3時間ほどいったところ、コータンというところに上・下のラルンゴンという2つの尼寺の廃墟があり、その地では現在、新築された仏塔を参詣することができる。

参考文献

略号と一次資料

『青史』　'Gos lo tsā ba gZhon nu dpal, *Deb ther sngon po.* (a) Chengdu: Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1984; (b) Tr. Roerich, G. N. *The Blue Annals.* Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949/53 (repr. Delhi, 1976).

『赤史』　Tshal pa Kun dga' rdo rje, *Deb ther dmar po.* Ed. Dung dkar Blo bzang 'phrin las, Mi rigs dpe skrun khang, 1981 (repr. 1993, 2004)

『ヴァイドゥルヤ・セルポ』　sDe srid Sangs rgyas rgya mtsho, *dGa' ldan chos 'byung bai ḍūrya ser po.* Ed. rDo rje rgyal po. Beijing: Krung go'i bod kyi shes rig dus deb khang.

『ウー・ツァン巡礼記』　Kaḥ thog Si tu III Chos kyi rgya mtsho, *Kaḥ thog si tu'i dbus gtsang gnas yig.* Ed. bSod nams tshe brtan. Lhasa: Bod ljongs dpe rnying dpe skrun khang, 1999.

『カダム明灯史』　Las chen Kun dga' rgyal mtshan, *bKa gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me.* Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang, 2003.

『ゲンドゥンチュンペー著作集』　(1) *mKhas dbang dge 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom phyogs sgrig.* Sichuan: Si khron mi rigs dpe skrun khang, 1988; (2) Ed. Hor khang bSod nams dpal 'bar, *dGe 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom.* 3 vols. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang. 1990 (repr. 1994); (3) Ed. rDo rje rgyal et al. *mKhas dbang dge 'dun chos 'phel gyi gsar rnyed gsung rtsom.* Hongkong, 2002; (4) Ed. Kirti Rin po che Blo bzang bstan 'dzin. *dGe 'dun chos 'phel gyi rab byed zhabs btags ma: gsung rtsom phyogs bsgrigs.* 2 vols. Dharamsala: Kirti byed pa grwa tshang, 2003; (5) Ed. Hor khang bSod nams dpal 'bar, *mKhas dbang dGe 'dun chos 'phel gyi gsung 'bum.* 2 vols. Sichuan: Si khron mi rigs dpe skrun khang, 2009.

『世界知識行・黄金の平原』　dGe 'dun chos 'phel. *rGyal khams rig pas bskor ba'i gtam rgyud gser gyi thang ma.* (1) Ed. Hor khang bSod nams dpal 'bar. *dGe 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom.* Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang, 1990. vol. 1, pp. 3-40 (= H); (2) Ed. Zam gdong pa Blo bzang bstan 'dzin. *mKhas dbang dge 'dun chos 'phel gyis mdzad pa'i gtam rgyud gser gyi thang ma.* Sarnarth: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1986 (= Z).

『梵文写本目録』　Rāhula Sāṅkṛtyāyana, (1) Sanskrit Palm-Leaf Mss. in Tibet, *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 21-1, 1935, pp. 21-43; (2) Second Search of Sanskrit Palm-leaf Mss. in Tibet, *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 23-1, 1937, pp. 1-57; (3) Search for Sanskrit Mss. in Tibet, *Journal of the Bihar and Orissa Research Society* 24-4, 1938, pp. 137-163.

『わが人生の旅路』　Rāhula Sāṅkṛtyāyana, *Merī Jīvana-yātrā.* vol. 2. Allahabad, 1950.

H　*dGe 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom* (I). bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang. 1990. pp. 3-40.

Z　*gTam rgyud gser gyi thang ma of dGe 'dun chos 'phel, With an Introduction cum Review by Ven. S. Rinpoche.* The Dalai Lama Tibeto-Indological Series-VII. Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies. 1986.

二次資料

井内真帆

2008　『後伝期初期のチベット仏教世界―カダム派を中心として―』、大谷大学博士学位請求論文。

稲葉正就・佐藤長

1964　『フゥラン・デプテル―チベット年代記―』、法蔵館。

加納和雄

2009　「ゲッティンゲン所蔵の仏典梵文写本管見―『バンドルスキー目録』序文の和訳―」、『高野山大学論叢』44、31-63頁。

川越英真

2004　「チベット仏教の後伝期開始とウ・ツァンの出家者の和尚に関する問題」、『東北福祉大学研究紀要』28、143-168頁。

格桑曲批

1996　『蔵族一代学術大師・更敦群培文集精要』、中国蔵学出版社。

白館戒雲・三宅伸一郎

2004　「ポトパの法話集『ベゥブム・ゴンポ』より「善知識に対する信仰と尊敬をいかに瞑想すべきか」和訳」、『法談』49、114-129頁。

三宅伸一郎

1999　「ランリタンパの伝説 ―伝説と伝記の間―」、『大谷大学大学院研究紀要』15、79-98頁。

吉崎一美

2008　「ネパールに帰る男とチベットに残される女」、『印度学仏教学研究』57-1、103-107頁。

Bandurski, F.

1994　Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von Rāhula Sāṅkṛtyāyana in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte, *Untersuchungen der buddhistischen Literatur, Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden,* Beiheft 5, Göttingen, pp. 9-126.

Bla brang skal bzang

1995　*Bod kyi ris med dgon sde khag gi lo rgyus mes po'i gces nor bu.* Delhi.

Bründer, A.

2008　*Account of a Pilgrimage to Central Tibet (dBus gtsang gi gnas bskor) by 'Jam dbyangs bstan pa rgya mtsho: A Neglected Source for the Historial and Sacred*

Geography of Tibet. Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.

Chos 'phel

2003　*Gangs can bod kyi gnas bshad lam yig gsar ma: Lha sa khul gyi gnas yig.* Beijing: Mi rigs dpe skrun khang.

Dung dkar Blo bzang 'phrin las

2002　*Dung dkar tshig mdzod chen mo.* Beijing: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.

Ferrari, A.

1958　*Mk'yen brtse's Guide to the Holy Places of Central Tibet,* Serie Orientale Roma XVI, Roma: IsMEO.

Harris, C. & Shakya, T.

2003　*Seeing Lhasa: British Depictions of the Tibetan Capital 1936-1947. Chicago: Serindia Publications.*

Hor khang bSod nams dpal 'bar

1983　'Phan por nyin skor du bskyod pa'i mthong thos dran tshul rags tsam gleng ba. *Hor khang bSod nams dpal 'bar gyi gsung rtsom phyogs bsgrigs.* 中国藏学出版社. pp. 673-677.

Huber, T.

2000　*The Guide to India: A Tibetan Account by Amdo Gendun Chöphel.* Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archives.

Iwao, K., Hill, N., Takeuchi, T., Hoshi, I. & Imaeda, Y.

2009　*Old Tibetan Inscriptions.* Tokyo University of Foreign Studies.

Ko zhul Grags pa 'byung gnas & rGyal ba Blo bzang mkhas grub

1992　*Grangs can mkhas grub rim byon ming mdzod.* Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang.

Lopez, D.

2006　*The Madman's Middle Way : Reflections on Reality of the Tibetan Monk Gendun Chopel.* Chicago/London: University of Chicago Press.

2009　*In the Forest of Faded Wisdom: 104 Poems by Gendun Chopel, A Bilingual Edition.* Chicago/London: University of Chicago Press.

Mengele, I.

1999　*dGe-'dun-chos 'phel,* A Biography of the 20th-Century Tibetan Scholar, Dharamsala: Library of Tibetan Works and Archieves.

Richardson, H. E.

1957　A Tibetan Inscription from Rgyal Lha-khang; and a Note on Tibetan Chronology from A.D. 841 to A.D. 1042. *Journal of Royal Asiatic Studies* 1-2, pp. 57-78.

rKong btsugs

2001　*lHa sa'i dgon tho.* Lhasa: Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang.

Roesler, H.-U. /U.

2007　*Kadampa Sites of Phempo: A Guide to Some Early Buddhist Monasteries in*

Central Tibet. Kathmandu: Vajra Bookshop.

Steinkellner, E.

2004　*A Tale of Leaves: On Sanskrit Manuscripts in Tibet, their Past and their Future.* 2003 Gonda Lecture. Amsterdam: Royal Netherlands Academy of Arts and Sciences.

Stoddard, H.

1985　*Le Mendiant de l'Amdo.* Paris: Société d'Ethnographie.

Vitali, L.

2003　A Chronology (*bstan brtsis*) of Events in the History of mNga' ris skor gsum (Tenth- Fifteenth Centuries). *The History of Tibet,* vol. II. Ed. Alex Mackay. pp. 53-89

(平成二十一年度文部科学省科学研究費・若手［スタートアップ］および三菱財団人文科学助成金による研究成果。)

謝辞

本稿作成にあたっては、ツルティム・ケサン先生、大谷大学三宅伸一郎先生、東京外国語大学星泉先生、ハンブルグ大学ドルジ・ワンチュク先生、大谷大学井内真帆先生、高野山大学川崎一洋先生のご教示を頂きました。またヒンディー語のサーンクリッティヤーヤンの自伝についてはウィーン大学ゴータム・リウ先生の未出版の独訳を参照させていただきました。記して謝意を申し上げます。

註

(1) 当該の写本調査において撮影された梵文写本は、パトナ博物館にオリジナルのネガフィルムとその焼き増し(ポジ)が保存される。これらは未公開であるが、別の1セットの焼き増しがゲッティンゲンの州立兼大学図書館に保管されており、それらは公開され、目録も出版されている(Bandurski 1994)。このゲッティンゲン・コレクションの概要およびチベット伝来写本の近年の研究動向については加納2009を参照されたい。またチベット伝来の梵文仏典写本の歴史と現況についてはSteinkellner 2004を参照。

(2) 本稿筆者は、『世界知識行』と『わが人生の旅路』所説のチベット寺院調査記録にもとづいて彼らの1934年における旅行日程を確定し、現地調査を踏まえて、2007年12月にウィーン大学において開催されたサーンクリッティヤーヤン研究のためのシンポジウムにおいて成果を発表した。

(3) ゲンドゥンチュンペーの伝記についての先行研究は下掲の「先行研究」の項を参照。

(4) Huber 2000: 30 n. 7; Lopez 2006: 11などを参照。

(5) ただしゲンドゥンチュンペーは、『青史』の英訳に果たした自身の功績が、訳者ルーリッヒに正当に評価されなかったことに不満を抱き、そのことを揶揄して次のような詩を残している。

知識・努力・学識を備えた謙虚な者の才能は、富に溺れた愚者の暴挙によって打ち砕かれた。理に適った尊敬の順序はかき乱され、獅子が犬に仕えるこのあり様は嘆かわしい。

shes brtson thos pa can gyi nyam chung gi kha stabs //
blun po nor rkyal khur ba'i dbang shed kyis bcom ste //
chos mthun bkur sti'i bzhugs gral go log tu bsdebs nas //
seng ge khyi yi g.yog tu 'gyur tshul 'di skyo ba // (Lopez 2006: 33 note 29, 2009: 68-69, poem 32)

（６）彼はこの時の無念なる思いを詩に託して、監獄部屋の壁面に書きつけたといわれる。

嫉みの血によって酔いしれた頑固な虎が
恐ろしい咆哮を放つ密林の中、
ただ独り置き去りにされた無実の幼子に対して、
賢者はどうか慈悲を向けて下さい。
phrag dog khrag gis myos pa'i u tshugs stag //
'jigs pa'i nga ro sgrogs pa'i tshang tshing nang //
gcig pur lus pa'i bden pa'i bu chung la //
shes rab can gyis snying rje'i yul du dgongs //

詩中の「虎」(stag)とは、ダライラマ政権の摂政タクター(sTag brag)・リンポチェ(1874-1952)を示唆するとLopez (2006: 43-44, 2009: 11)は述べる。なお、この詩は『世界知識行』第8章(H, vol. 1, p. 271)にも見られるため、もともとは1941年(同書の成書年)より前につくられている。

（７）このような自身の波乱に満ちた生涯を詩に託して次のように語っている。

高貴な家系、高僧〔活仏〕の系譜、在家者の在り方、
裕福なとき、貧窮のとき、
最高の高僧、最低の在家者など、
一つの生涯において〔わが〕身はめくるめく変わり続けた。
gdung btsun btsun pa'i rigs dang phal ba'i thsul //
mgo rgu tshang ba'i dus dang sprang po'i dus //
btsun pa bzang shos khyim pa sdug shos sogs //
skye ba gcig la lus rten mang du brjes // (Lopez 2009: 11-12, 92-93, poem 51)

（８）本稿末尾の参考文献の『ゲンドゥンチュンペー著作集』の項を参照。

（９）伝記についての先行研究と概要はLopez 2006: 4-46を参照。

(10) 先行研究のまとめはHuber 2000: 29, n. 1, 2なども参照。

(11) H. (vol. 2), p. 188, Z. p. 40: dge 'dun chos 'phel nas sing ga la bye can gyi dgon par yod dus su phul。この直前の箇所には、本書の草稿の校正を知人に懇願する文章が綴られているので、この校正者が宛先人である。『世界知識行』のサムドン版の編者序文(pp. 23-24)は、この知人をウー地方またはアムド地方に住む親友であり詳細は不明としながら、ニンマ派の学者であった可能性を指摘する。一方、『世界知識行』のホルカン版の末尾でホルカンは次のように注記する。「〔ゲンドゥンチュンペーは〕このテクスト〔『世界知識行』〕の別の複写本を、アムドにいる或る大士に見てもらうために贈ったのであり、この箇所〔すなわち奥書〕は別の原本複写本にあるので、〔私ホルカンが〕ここ〔『世界知識行』末尾〕に添えた。」(『ゲンドゥンチュンペー著作集』H, vol. 2, p. 188)

(12) Lopez 2006, 2009参照。

(13) Lopez 2006: 38-39, 2009: 81-83, poem 42.

南方の砂の平地を疲れた足取りで歩み
漆黒の海という溝によって廻らされた土地の境を横断し
貴重でかけがえのない生命の糸を白刃の上で手繰り寄せ
苦難の長い年月を終えて、ようやくこの書が完成した。
lho lam bye ma can gyi thang du ngal ba'i rkang 'gros rab bkod cing //
ngam nag rgya mtsho'i 'obs kyis bskor ba'i sa yi mu khyud mngon brgal te //
gces shing 'phang ba'i srog gi nyag thag ral gri'i so la drangs pa las //
dka' ba'i lo zla ring mo zad nas ci zhig ltar stes gzhung 'di grub //

大仰な予言や黄金の曼荼羅を以って
要請する人は誰ひとりいないが、
知識の宝蔵が捨てられることを憂慮して、
自ら、苦難の重荷を引き受けて著述した。
chen po'i lung dang gser gyi maṇḍala bcas //
bskul ba'i skyes bu su yang ma mchis kyi //
rigs (read: rig) pa'i dbyig mdzod 'dor la 'phang ba'i blos //
rang gis dka' ba 'khur du blangs te bris //

権力を血眼で渇望する者の、燃え上がる
橙色の嫉みの眼差しに、ひどく怯えながらも
益少なき学問を積み重ねる習慣に
慣れ親しんだ我が心は、理に適った話に魅せられた。
dbang 'byor khrag la rngams pa'i me 'bar ba'i //
dmar ser phrag dog mig la cher 'jigs kyang //
gnog chung thos pa bsags pa'i bag chags la //
goms pa'i rang sems rigs pa'i gtam la chags //

〔本書の内容が〕学問・努力・智慧ある御方の心の入口に
僅かでも入ることがあれば、〔それが私の〕求めた成果であり、
愚者の微笑みや富者の感謝を
求めることなど夢にも考えていない。
thos brtson shes rab can gyi snying gi sgor //
ci ste zhugs na 'bad pa'i 'bras bu ste //
lkugs pa'i 'dzum dang phyug po'i legs so la //
re ba'i rmi lam bdag la nam yang med //

飲食への欲を尽くした、墨まみれの集まり〔たる我が身〕が朽ちて、

利養と恭敬を顧みない白骨の集積〔たる我が身〕がばらばらになった時に、
苦労して積み上げた学識の集まりを文字の姿にしたためたこの〔本書〕が、
まだ見ぬ〔未来の〕友らの前に、益多き道を示しますように。
zas dang skom gyi mkho ba zad pa'i snag gi phung po zhig gyur cing //
rnyed dang bkur bsti'i re thag chad pa'i rus gong tshogs rnams 'thor ba na //
dka' bas bsags pa'i mang thos phung po yi ge'i gzugs su gyur pa 'dis //
ma mthong grogs po rnams kyi mdun du rgya chen phan pa'i lam mtshon shog //

(14) ホルカン版の全集およびLopez 2003: 12 n. 6に従う。なおMengele 1999: 95-96にも全章の題名が列挙され、第1章のみを収録するサムドン版（pp. 36-37）にも2章以降の内容が列挙される。各章の題名の原語は下記の通り。

第1章 thog mar lha sa nas phebs thon mdzad pa'i tshul
第2章 rgya gar gyi yul spyi'i chags tshul
第3章 yul gyi ming btags tshul
第4章 byang phyogs kyi gangs ri dang de las 'phros pa'i dogs dpyod
第5章 sngon gyi gnas yul grags chen rnams ji ltar yod tshul
第6章 skyes pa bud med bza' btung yod byad sogs kyi skor
第7章 shing dang me tog sogs kyi ngos 'dzin dang ngo ji ltar 'phrod tshul
第8章 sngon dang da lta'i yul so so'i yig rigs
第9章 bod yig gi sgra sbyor skor
第10章 chos rgyal mya ngan med kyi yi ge ri na ga re'i brag ngos la brkos pa
第11章 Gupta's rgyal brgyud skor
第12章 Pā la'i rgyal brgyud skor
第13章 sangs rgyas 'das rjes kyi lo brgya phrag bcu drug nas da bar
第14章 Singgala'i lo rgyus skor
第15章 sngon dus bod pa rnams kyi gnas skabs dang tshul lugs ci ltar yod lugs skor
第16章 mu stegs kyi chos lugs
第17章 mjug rtsom

(15) 第2章の題名をLopez（2003: 12 n. 6）がrgya gar gyi yul spyi'i chags tshul dang ming btags tshulとするのは誤り。

(16) 第8章については星准教授の研究班が和訳を準備している。またDonald Lopez教授は全体の英訳を準備している。

(17) Stoddard 1985: 167-170, 349, 384を参照。

(18)『わが人生の旅路』（vol. 2, pp. 262-263）には、ラーフルによるゲンドゥンチュンペーへの讃辞がさらに詳しく記される。

(19) Sāṅkṛtyāyana 1935: 24, 27を参照。

(20) レディン・リンポチェは当時のダライラマ政権の摂政。正式名はThub bstan 'jam dpal ye shes bstan pa'i rgyal mtshan。略歴はKo zhul et al 1992: 1643-1644, Dung dkar 2003: 1937-1938などにくわしい。当該の梵文写本調査に参加したカンワル・クリシュナはレディン・リンポチェの水彩画の肖像を描いており、Harris & Shakya 2003: 113に掲載される。『わが人生の

旅路』(vol. 2, pp. 247, 252-253)には次のように記される。

レディン寺にはいくつかの貝葉経があるようだ。この寺院はディーパンカラ・シュリージュニャーナの弟子であるドムトゥンパによって11世紀中葉に建立された。この寺院の偉大なラマ〔すなわちレディン・リンポチェ〕は、〔1934年〕当時、チベットの摂政だった。7月10日、私は彼を訪ねた。談合は一時間半におよび、彼は、「どこであれ必要とあらば、私は手紙を書きましょう」と約束してくれた。同寺院の貝葉経については、半数が焼けていると述べていた。…

(p. 252) 貝葉経の存在についての噂は処々で耳にしていたが、そのうちの七割ほどは事実無根であろう。しかしいくつかの場所には存在しうる。シッキム出身のラマ・ウゲンは、サムイェー寺で政府の印で封ぜられた部屋の中に数帙の貝葉経が収蔵されると述べていたし、(p. 253) ミンドゥンリン寺には4帙の経帙が存在する可能性がある。ゴル寺とサキャ寺については多くの人々が語っている。しかし今、私はラサの北、私にとって唯一のチャンスであるレディン寺へ行かねばならない。7月28日、レディン・ラマ〔すなわちレディン・リンポチェ〕は〔レディン寺に住む〕住持宛ての手紙を私に手渡した。…ネパール人写真家ナティラはラサから私に同行する手筈が整っていた。7月29日にはゲンドゥンチュンペー(Dharmavarddhana)が私のもとを訪ねてきた。…

レディン寺にはディーパンカラ・シュリージュニャーナによってもたらされた数点の貝葉経があることを耳にしていた。レディン・ラマは当時、ダライラマの摂政であり彼に会った。私の質問に応じ、彼は、一度、火災で一部が焼けた経帙があると答えた。彼はいかなる経帙のことを述べているのだろうか。もしそれがディーパンカラ・シュリージュニャーナのもたらしたものならば、それは宗教作品、哲学作品、タントラ作品、あるいは、その他のあらゆる可能性があろう。またもしそれがディーパンカラ・シュリージュニャーナの弟子ドムトゥンパのものならば、それは韻文で記されたタントラ作品または成就法であるかもしれない。どのようなものであれ、私はその写本を何としても拝見したかった。チベット政府の刻印がなされた全ての古写本、経帙、タンカなどを拝見させてもらえるよう、私は政府に懇願した。…

政府からの即答は全く期待していなかったので、レディン寺に収集・保管されたインド写本とタンカを拝見することを認可するレディン・リンポチェからの手紙に私は感動した。

(21) 当日のことは『わが人生の旅路』(vol. 2, pp. 252-253)に次のように記される。

私はモンゴル人比丘チュータクとアムドのゲンドゥンチュンペーを連れて行こうと考えた。チュータクはゲンドゥンチュンペーと同行する気は無く、ゲンドゥンチュンペー〔だけ〕が、彼の寺〔すなわちデプン寺〕を去ってからやって来た。それゆえ我々は彼を連れて行った。

(22) 1938年の写本調査にはゲンドゥンチュンペーも同行しており、『世界知識行』(H. p. 16, Z. p. 13)のポカン寺の項目に以下のように記される。「以上、この年(1934年)と、後、寅年(1938年)に再びパンディタ〔サーンクリッティヤーヤン〕と2人のインド人を伴ってインド写本の調査の目的でやって来た際にも、多くの日にわたって広くかつ詳細に調査したことがあるので、後先2回において見たもの全てをまとめて上記した。シャル寺とサキャ寺などについても同様である。」

(23)『ゲンドゥンチュンペー著作集』序文(H, vol. 1, pp. 1-2に基づく拙訳):

『世界知識行・黄金の平原』をはじめとする御著作は、大学者先生〔ゲンドゥンチュンペー〕が遺言にて「私の遺品はお前が*管理しなければならない」と仰って私にお渡しになった全ての手書き写本原本を私は保管して保存していたが、1962年に中国科学院人民委員会人民研究局、チベット少数民族社会・歴史研究部がチベットを訪ね、歴史調査のための調査資料を要求なさり、この大学者〔ゲンドゥンチュンペー〕の著作『世界知識行・黄金の平原』の完全な原本を借り出して複写なさり、〔頁の〕欠如なく私に返却なさった。しかし〔この後の〕文化大革命のときに私は参事室参事員であったので、あらゆる書類はチベット自治区の参事室事務局に回収されて、後に返却されることはなかった。

しかしながら〔後になって『世界知識行』の〕複写本について、中央政府歴史研究部局の局長であるKhrin cin krung氏に所在をお尋ねしたところ、完全な書類は中国社会科学院の民族研究局にあると仰ったので、私は首都北京に赴く毎に探し求める心づもりでいた。1988年に北京で蔵学中心の会議が開催され私が参加したとき、中国社会科学院民族研究局に複写本を求めると(gsol ras zhu bar)、「移転の際に昔探したが残りの所在は分からなくなってしまった」と仰ったので、事務局長のKru'u ji'i yon氏が主任を務める歴史委員会の同僚たちにふたたびお願い申し上げた。チベットに戻った後、チベット自治区の社会科学院の代表者であるラクパブンツォー氏も前後にこの大学者の著作に大いにご関心を寄せられただけに留まらず、さらには現在未出版の著作だけではなく、全著作を西蔵蔵文古籍出版社から出版することを約束していただいた。

(*巻末正誤表によってkyiをkyisに訂正。**巻末正誤表によってkru'u ji'i tha'o kyiをkru'u ji'i yon kyisに訂正。)

(24)『ゲンドゥンチュンペー著作集』序文(H, vol. 1, p. 4)には次のように述べられる。「出版に際してはまた、現時点において、いかなる手書き写本の原本も見ることができないため、複写本からコピーした。それゆえ校正・編集作業が難航した。」

(25) 2版にみられる異読が双方とも採用可能である場合は、サムドン版の読みを優先し、ホルカン版にみられる異読を注記した。また、ホルカン版とサムドン版のそれぞれの巻末に附される正誤表の読みについては、それぞれ略号H (em.)、Z (em.)を用いて指摘した。

(26)「あなた」とは、本書の読者あるいは、ゲンドゥンチュンペーが本書を宛てた相手を指すか。上記注11参照。

(27) H:「昔の良い風習から」(sngon gyi srol bzang las)。Z:「正しい法統から」(dam pa'i chos lugs las)。

(28) 直訳は「貴賤問わずあらゆる人々の」。あるいは「高貴、下卑、平民の人々による」とも訳しうる。

(29) Zは「河」を欠く。

(30)「素晴らしい偈頌とみなされうる」。字義通りには「素晴らしい偈頌として数えられうる」。

(31) rMa rgyal spom ra。アムド地方を代表する雪山。アニマチェン(a myes rma chen)とも呼ばれ、マジェポムラ神が宿るとされる。

(32) マジェポムラ山を源流とする黄河のこと。

(33)「詩感」(nyams)。サンスクリット語で「感動」や「美的陶酔」を意味するrasaに対応し、インドの古典演劇、詩作品、音楽などの芸術における美的概念を示す。

(34) Z:「ありきたりのもの」(dngos chas), H:「日用品」(yo byad)。

(35) Z:「憶測で」(tshod 'jog gis), H:「無意味な」(don med kyi)。

(36) H:「知ったかぶりをすれば嘘つきとなることは」(rlom pas smras na rdzun mkhan du 'gro ba ni), Z:「あてずっぽで語るならば妄言となることは」('ol tshod kyis smras na rdzun du 'gro ba ni)。

(37)「真相を知ることがあったならば」は「真相についての知識が生じたなら」とも訳しうる。

(38)「私」(phran bu)。この phran bu という語は「私」の他に「わずか」の意味もあり、その意味の用例も本書にみられる(Z, p. 13: legs sbyar yang phran bu bslab pa'i、「サンスクリット語もわずかばかり学んだ」)。また本書では一人称「私」を表現するために kho bo を使用することが多いが、当該箇所では文脈から判断して phran bu を「私」と訳した。

(39) H:「自分のツァンパ袋を守るために」(rang gyi rtsam khug bsrung ba'i ched du)は Z に欠落。

(40) H:「心の真っ直ぐな」(blo gzu bor gnas pa)は Z に欠落。

(41) H:「自分の生活などをどれほど損なうことになってしまうかについては」(rang gi 'tsho th abs sogs la ci tsam gnod par 'gyur ba)。Z:「自ずから暴言や軽蔑を目指すものとならねばならないこと」(rang nyid tshig tsub dang / brnyas smod kyi 'ben du byas nas sdod dgos pa)。

(42) Lopez 2009: 90-91, poem 50.

(43)『世界知識行』第11〜14章までの王統紀などの歴史的考察に関する箇所を指すか。

(44) H:「サキャパンディタが」。Z:「チベットのある偉大な方が」。当該の典拠は未比定。

(45) サーンクリッティヤーヤンは『わが人生の旅路』の中で、ゲンドゥンチュンペーとの出会いと讃辞を記し(vol. 2, pp. 249, 262-263)、またレディン寺へ向けて出発した日のことも記す(vol. 2, pp. 252-253)。本稿序文および Stoddard 1985: 167-170, 349, 384を参照。

(46)「パンディタと我々」とは、サーンクリッティヤーヤン、ゲンドゥンチュンペー、ナティラ(ネパール人写真家)、ソナムギャツォ(ロバの世話役)を指す。『わが人生の旅路』(vol. 2, p. 253)参照。

(47)「ラサの貴族」。『梵文写本目録』(Sāṅkṛtyāyana 1935: 21-22)には「私はスルカン家の紳士サクショに大変助けられた」とあるため、ラサの貴族とはスルカン家を指す。また、吉崎2008: 103は、サーンクリッティヤーヤンがネパール交易商人ダマン・サーフの経済支援を受けていた点を指摘する。

(48) ペンユル(ペンポ地方)の歴史については、白館・三宅2004、Roesler 2007、井内2008: 41-45などを参照。

(49) すなわち谷を隔てて山の両側。

(50) ランタン寺の歴代座主については、『赤史』(p. 62、稲葉・佐藤 1964: 141)、寺院については『青史』(a: pp. 330-331, b: pp. 270-271)、『カダム明灯史』(pp. 448, 450)、『ウー・ツァン巡礼記』(p. 370)、Ferrari 1958: 39、三宅1999、rKong btsugs 2001: 188-189、Chos 'phel 2003: 170-172、Dung dkar 2003: 577-558、Roesler 2007: 30-33、Bründer 2008: 123などを参照。サーンクリッティヤーヤンはランタン寺訪問の様子を『わが人生の旅路』(vol. 2, p. 253)に次のように記す。

> ランタン寺が〔パーヤ村から〕たった2マイルのところにあるとは、知る由も無かった。さもなくば、すでに前日(1934年7月30日)のうちにそこまで来ていたのだが。ペンポ地方の広

大な谷が我々の眼前に広がっていた。〔一般に〕古い寺院がそうであるように、ランタン寺もまた平地に立っていた。ランタンパ・ドルジェセンゲはたいそう厳格な比丘であった。外見からすると、この寺はかなり貧しそうに見え、僧たちも相当貧しそうに見えた。〔寺院〕内の物は無秩序に並べられていたが、いくつかのインド由来のすばらしい像があった。弥勒と仏陀の像は真鍮製で、インドの(正しくは「チベットの」: 訳者注) 瑜伽行者パダンパサンゲの塑像はかなり古そうだった。書物の中では、ランタンパ (Glang ri thang pa rDo rje seng ge, 1054-1023) の時代の金字で綴られた『八千頌』は素晴らしかった。我々はたくさんの写真を撮り、食事をしてから正午12時に出発した。

(51) ポト寺については、『青史』(a: pp. 327-330, b: pp. 269-270)、『ヴァイドゥルヤ・セルポ』(p. 175-176)、Ferrari 1958: 39, 83 n. 26、rKong btsugs: 2001: 190、Chos 'phel 2003: 194-195、Dung dkar 2003: 1273-1274、Roesler 2007: 46-49、Brunder 2008: 122などを参照。

(52) ダギャ寺についてはChos 'phel 2003: 195、Roesler 2007: 44-45、Bründer 2008: 122を参照。

(53) 「始めと終わり辺り」。その谷の前後を意味するものか。

(54) ギェーラカンについては、『青史』(a: pp. 117-122, b: pp. 87-93)、『ヴァイドゥルヤ・セルポ』(p. 176)、Hor khang 1983: 673-675(本稿末尾の補足資料を参照)、Richardson 1957、Bla brang skal bzang 1995: 162-168、rKong btsugs: 2001: 183-185、Chos 'phel 2003: 178-180、Dung dkar 2003: 704-705、Roesler 2007: 24、Bründer 2008: 124などを参照。『わが人生の旅路』(pp. 254-255)にサーンクリッティヤーヤンはギェーラカン訪問の様子を以下のように記す。

〔1934年8月1日〕12時に〔パツァプ寺を〕出発。わずか1.5マイル進むと、古刹ギェーラカンがみえた。石碑や古い型の仏塔をみるや否や、8 - 9 世紀の寺院に到着したことがわかった。尋ねると、アショカ王がティソンデツェンにこの寺院を建立させたという。石碑は四面からなり、東、北、西、南それぞれに、金剛杵、羯磨杵、蓮華、宝珠が刻印されていた(rgyal stod に現存: 訳者)。最古のお堂は弥勒堂のようだった。

ここには 3 セットのカンギュル・テンギュル写本があった。これらの古い寺院には同種のたくさんの写本の山がある。すなわちそのうちの大半は何百年も開かれていなかったのである。… 我々は巨大な弥勒堂(rgyal smad に現存: 訳者)で宿をとった。このお堂にはいくつかの古い弥勒像がある。他のお堂にも同じく古い像やタンカがある。

ここには、トゥーとメーという 2 つの学堂(grwa tshang)があり、かつては定期的に講義が行われていたが、最近では講義は無くなっていた。石碑には古い碑文がある。弥勒堂には古い紙写本よりなる経巻がいくつかあった。(p. 255) そこの住職に話しかけると、彼は私に『十万頌』の中の一帙、すなわち Pha 帙を与えた。私はそれをパトナ博物館に提供した。その文字は古いが、13世紀以降のものである。その写本の冒頭には仏陀の細密画が二つみられる。

(55) 典拠は『青史』(a: p. 105, b: p. 76)に見られる。

仏教の基盤たる他よりもとりわけ貴い四大聖地(gnas chen po bzhi)には、勝者弥勒の化身であるシャン・ナナム・ドルジェワンチュクが建立なさった、珍宝のためとりわけ貴いギェー・ルクヘー(rgyal lug lhas)のお堂、…

四大聖地とは、このギェーラカンと、ゴク(rNgog Byang chub 'byung gnas)が建立したシュ(gZhu)の僧院(kun dga' ra ba)、善知識トゥメル(Gru mer Tshul khrims 'byung gnas)らが

建立したタンポチェ(Thang po che)、タパ・ゴンシェーが建立したタタン(Grwa thang)とから成る。なお、『世界知識行』にしばしばみられる『青史』への言及は、ゲンドゥンチュンペーが携わった『青史』の英訳の知識が前提となっていると考えられる。

(56) 10世紀チベットにおける仏教復興運動に寄与したラチェンポとルメーについては川越2004を参照。

(57)『青史』(a: pp. 117-118, b: pp. 87-88)にはシャン・ナナム・ドルジェワンチュクの略伝が記される。

ナナム・ドルジェワンチュクは、父ナナム・ジョセー(sNa nam jo sras)と母シャンチョム・ドマ(Zhang lcom sgrol ma)の息子として火の鼠年(976年)に、ニャムガワ(Nyams dga' ba)において生まれた。彼が3歳のとき、土の虎年(978年)に、律の教えがカム地方からウー地方に流布した。18歳のとき、水の蛇年(993年)に、ラワドゥムポ(Ra ba zlum po)という場所でルメーのもとで〔具足戒を授かり〕出家した。その年は、ランダルマ王の鉄の鳥年(901年)から〔数えて〕93年目である。そして、まずツァク(Tshag)のお堂を建立し、その後、37歳、水の鼠年(1012年)にギェー・ルクヘーのお堂〔すなわちゲェーラカン〕を建立した。この年にはマルパが生まれた。〔ドルジェワンチュクは〕85歳、鉄の鼠年(1060年)に亡くなった。彼はインドへ律の教誡を求めに行き、ドルジェデンパに出会った。ドルジェデンパは別の二人の沙弥をして彼〔ドルジェワンチュク〕に律を聞かせてから、その二人に律を説いたといわれる。もし事実ならば、〔ドルジェデンパの言葉を通訳した〕翻訳師も知っていたのだろう。

また『カダム明灯史』(p. 160)には以下のような略伝がみられる。

ギェーのシャンチェンポは、ルメーの弟子の「四柱」の一人。名をドルジェワンチュクといい、ギェーラカンなどの寺院をたくさん建立なさった。ゲシェートゥンパ〔すなわちドムトゥン〕のゲニェンの学処を授けた規範師である。ジョウォ〔アティシャ〕を招待するために、マンユルに行き、教えを授かり、主尊として仏を授かった。〔アティシャは〕主に見解浄化という教誡を仰った。さらに、十三欲、十八所知法、規定四喩、四決定法、光明心決定などの教誡をたくさん聴聞なさったようである。

その他、Ko zhul *et al* 1992: 943、Dung dkar 2003: 1761などを参照。

(58) ギェーラカン、ラマ・チャムカン、チェンレー・チャムカンの各寺院には弥勒像があり、あわせてペンポの「弥勒三兄弟」(byams pa spun gsum)と呼ばれる。rKong btsugs: 2001: 183、Chos 'phel 2003: 179、井内2008: 45、Bründer 2008: 124を参照。

(59)『わが人生の旅路』(pp. 254-255)によると3セットのカンギュル、テンギュル写本が存在したという。上記注54参照。

(60)『世界知識行』第8章などを参照。

(61) この弥勒石像は現在、ギェーラカン本堂(ギェトゥー)から100メートルほど離れた小堂に安置され、鮮やかな彩色が施されており、銘文は金泥でなぞられている。以下は本稿筆者の調査に基づく銘文の翻刻である。

mchod gnas dam pa byams pa'i sku gzugs 'di //
yon bdag dam pa gtsang rdo dkon brtsegs kyi (H Z: kyis) //

gnas kyi dam par rgyal mtshan btsugs pa ni (H: pa 'dir, Z: pas 'dir) //
'bras bu dam pa byang chub mchog thob shog //

『世界知識行』に記される真言が実際の銘文に見えないのは、近年施されたであろう彩色によって隠されてしまったためと思われる。

(62) ここまでの記述は Bla brang skal bzang 1995: 164に引用される。

(63)「スンデン修辞法」(zung ldan)。サンスクリット修辞用語の yamaka に起源があり、同音反復による修辞法を指す。

(64)「長音記号を記すこと」。ここでは'a chung で示された長音を指す。オーム字の長母音については『世界知識行』第８章(H, vol. 1, pp. 258-259)に論じられる。

(65) 古い時代におけるサンスクリット語の綴り方ついては『世界知識行』第８章(H, vol. 1, p. 263)に論じられる。

(66) 典拠未比定。

(67) この箇所は『世界知識行』本文には無く、実際の碑文によって補った。下記注72参照。この一文は、1012年のギェーラカンの建立を示唆するものと考えられる。

(68)「専念」は、実際の銘文 phyogs gcig pa の読みに従った。ゲンドゥンチュンペーの読み blo gcig pa には従わない。

(69)「少ないので」は、東面下部銘文の読み nyung bas na に従った。ゲンドゥンチュンペーの読み nyung na / 'o na yang は文脈に合わないため従わない。下記注72を参照。

(70)「主尊として」(lhar)。Richardson 1957: 66は lhar を「再び」と訳す。

(71)「この十を実行したなら」。実際の銘文は「以上の如く行ったなら」と記す。

(72) 校訂テクスト中の銘文本文は Richardson 1957の転写と実際の碑文に基づき適宜訂正した。銘文は東面上部、東面下部、南面にみられ、ゲンドゥンチュンペーが言及しているのは東面上部の碑文である。このうち東面下部の銘文は、東面上部すなわち銘文本文の前半部分にほぼ対応するため、その複写とみられる。以下、本稿筆者の調査(2006年９月)に基づいた翻刻である。

[東面下部銘文]

[１行目] dam pa'i chos kyi srol btsugs pa la / spyi deng sang gi dus su [２行目] dge ba la bsam pa mthun pa dang / bya ba bzang po la gros mthun pa [３行目] ni nyung bas na / dkon mchog gsum la skyabs su gsol [４行目] ba'i mi rnams kyis ni

この銘文の１行目は、実はゲンドゥンチュンペーおよび Richardson が調査した当時、鉄板で隠され確認しえなかった文である。この文を補足することによって銘文が再構築できるので、以下に東面上部の銘文本文の全体を示す。略号 R は Richardson (1957: 66)を指し、H、Z はそれぞれホルカン版、サムドン版のテクストを指す。

[東面上部銘文]

dam pa'i chos kyi srol (以上は下部の銘文からの補足) [１行目] btsugs pa la / spyi deng (Z ding) sang gi dus su ni / [２行目] dge ba la phyogs (HZ: blo) gcig pa dang (HZ om.

dang, R: la dang) / legs [3行目] pa la gros 'thun ba ni <nyung na / 'o na yang> (< >括弧内は下部銘文に従って nyung bas na と読む) dkon [4行目] mchog gsum la skyabs su gsol (HZ: 'gro) ba'i myi [5行目] rnams kyis ni / lhar sangs rgyas gzung / gros [6行目] phugs chos la / gtad (HZ: gtod) / gtsor lta ba sbyang / chig [7行目] spyod rnal du dbab / 'tsho ba gtsang mar bsgrub [8行目] byed dgu chos dang sbyar / spyi gros gcig du [9行目] bzlum / sgo gnyer so sor blang / ngan gros dgog (HZ: dgag) [10行目] du (HZ: tu) dbyung / bden gtam dang du blang / 'di ltar (H: 'dir bcu, Z: 'di bcu) [11行目] byas na 'tshe 'di dang phyi ma gnyi (HZ: gnyis) gar bde bar [12行目] 'gyur bas (R: byas) / chig bcu po 'di (これ以下 HZ 欠) yal [13行目] bar ma dor zhing gzungs [14行目] su bzung na legs so // (15行目以下は判読困難) [...] bsam myi khyab [...] rnam pa kun tu sgrib sbyang [...] kyi dge ba [...].

[南面碑銘]

(鉄板で隠れた一行は読解不能) 'phan / yul klung skyes ngo mtshar che

ただし石碑は、ゲンドゥンチュンペーやリチャードソンが調査した後、度重なる修復を受けており、銘文にも手が加えられているため注意が必要である。同碑文についての先行研究をまとめる Iwao *et al* 2009: 85は、Richardson 1957: 65の記述に従って、その年代を1012年以降のものする。

(73)「これを忘れずに記憶するべし」(yid la ma brjed par gzung bya ba)の箇所は、実際の銘文には「これ(十句)を捨てずに陀羅尼として保持すると良い。」('di bar ma dor zhing gsungs su bzung na legs so)とある。

(74) すなわち chig という旧綴りのみがみられ、tshig という現在の綴り方はみられないという意味。

(75)「威勢」。銘文作者が「建立する」btshugs に敬語形 bzhengs を使用していないためか。

(76) タシツェクおよびウデについては Vitali 2003を参照。

(77) Hor khang 1983: 673-674.

(78) 上掲拙訳の『世界知識行』の [4.1 ギェーラカン略史] を参照。

(79) 迦葉を指すと思われる。

(80) Chos 'phel 2003: 178-180.

<キーワード> 「チベット伝来梵文写本」、dGe 'dun chos 'phel、Rāhula Sāṅkṛtyāyana。